目次

社會と教化（時言）……本多日生
法華三聖に關する感想……井上哲次郎
佛教と政道……本多日生
記事報道十數件……
法華經要文講義……本多日生

第廿六年五月號

時言

社會と教化

本多日生

今日は大切な問題が多々横つて居りますが、中にも社會の狀態を健全に導いて誤ちのないやうに、立派な社會を建設しやうとすることは、あらゆる問題の中に最も重大な意義を持つのであります、或は社會改造、或は社會改良、我は社會政策といふやうな名に依つて、種々論議されて居りますが、近來はこの「社會教化」といふ言葉が現れて、大分この方にも力を入れるやうになつて參りました、私はこの社會教化の必要と、社會教化の方針とに就いてお話をしやうと思ふのであります。

社會教化の必要

人生社會は非常に複雜なものであり、末の方から考へたならば、この社會を善くするに就いては、樣々な問題が起るのである。社會政策に就いても、

色々の事柄を實行しなければ、理想の社會を造ることは出來ないのでありますが、この複雜な社會もその根本に戻して考へると、人の心の現はれに外ならぬ、社會學と稱するものがあつて、人類が社會を成してから以來今日までの種々の事柄を研究し、それに就いて色々の科學的の學問があります、又今日は社會政策に就て、色々の問題が提供されて居ります、如何にも面倒な事でありますけれども、その根本を考へますれば、何時の時代でも如何なる事柄でも、人の心の關係しないことは一つも無いのであります、それ故に社會を健全にする根本問題は、人の心を善くするより外ないのであります。是は長い間その方針を以て、例へば古來の聖賢といふやうな人は皆そこに重きを置いてやつて參つたのでありますが、近世の文明がその事では足りまいと考へ、又その反動を生じて、社會を物質の側からと組織の側から考へることになりました、無論それも大事でありますけれども、それが爲に心の方面を、殆んど忘れたのであります。歐米の文明がさういふ傾きを取つた爲に、日本が之を模倣するやうになり、日本の社會狀態も過去五十年の長きに亘つて、人心の教化から組立てることを忘れて居つたのであります。それ故に日本の社會狀態は不健全に成つたのである、その例を擧ぐれば澤山あることであるが、大體に於て今日の民心は甚だしく墮落をして參つた、即ち物質慾の方が盛んになつて來た。學問する者に就て考へてもさうである、教育は何の爲に與へるかと言へば、生活に必須なる知識技能を與へると云ふ、食つて行くのに困まらぬやうに、知識なり技能なりを教ふるが、教育の目的とせられて居る。それ故に學生はどういふ學問をしたならば好く

飲が食へるかといふ事が主な動機となつて居る、それ故に工業が盛んな樣であれば工科の方へ志願し、醫者の方が食ふのに工合が好ければ醫科に志願するといふ樣な、生活を目的にして進んで行くのであります學問する者の觀念が既にさうであれば、學問しない者はそれよりももつと低い考に居るのであります。

斯樣にして段々にやつて來た結果、今日の民心は非常に墮落して居るのである。表面を飾つて色々理窟を言うて居るけれども、我が政治界に於ても、政治界の裏に隱れて居る所の强き力は、卑しむべき自利心であつて、低き慾望が政治界の實際を支配して居るものである。又勞働問題の內部に於ても、資本家にしろ勞働者にしろ、その頭を支配するものは物質的自利の精神に外ならぬ。その他社會の現象に就いて種々忌むべき事の現はれて來るのは、皆この人心頽廢の結果であつて、是は實に恐るべきことと思ふ。金を得れば成金風となり、金を得ざれば世を怨嗟して粗暴な運動に移るのである。或る者は生活の安固さへ與へたならば、社會は安定を得るやうに思ふて居るけれども、それは實に愚な考である。無論生活の問題は大切ではあるけれども、生活が安全であつたならば、社會が善く行くものならば、富豪は皆人格が善くなる筈である。金を得たる所の者は成金風などは吹かさないで、立派な美風が起るべきであるけれども、教へざる人間は金を得れば腐るし、得なければ怨むし、孰れにしても間違つた行動に出づるものである。それを物質の側から判斷して、金を得ないから不平を言ふ、金を得たら善くなるといふやうな俗論を以て、世の中に立つ政治家もあれば、新聞記者もある、さういふやうな俗論を臆面もなく吐いて居る人が非常に多

い、是も明かに人心の墮落して居る證據である、世が世てあればそんな俗論を顧みる者はないてあらゝ。それは「衣食足つて禮節を知る」といふやうなことを能く言ふけれども、それは無學の話てあつて、その言葉の頭には「小人は」といふことが附いて居る、儒教て小人と言へば、人格の壞れた者を言ふのてある、人格の整はぬ者は飯が食えぬと不都合な事を仕出かすけれども、眞人間てあつたならば食ふ食はんの問題を別として、人格を修めて行かなければならぬといふが、儒教に教へた精神てある。「小人は」との文句を切つて仕舞つて、衣食足つて禮節を知るといふから、先づ以て生活の問題、先づ以てパンの問題が大切だと言ふ、總て社會改良の事は生活の問題を第一義に置かんければならぬと言つて居る、皆と言つては少し激しいけれども、先づ皆と言つても差支ない位にワイ〳〵言つて居る。是は人心墮落の證據てあります。

そこにもう一つ恐るべきものが起つて來た、それは思想の不健全てあります。不健全といふ事も標準の置き方に依つては、國體さへ瑕つけなければ敢て差支ないといふやうな議論をして居る人もあるけれども是は頗る粗雜な考てあつて、不健全といふ事は國體に差支がないからと言つても、それだから健全だといふ事は言はれない、色々の方面より考へられる事てあつて、先づ普通に健全といふ事を極く寛大に見た所が、その國の歴史的に發達したる善良な風俗習慣等を輕卒に破壞するやうなものは、是は不健全と言はなければならぬ。又歐米の思想を入れるにした所が、愼重な批判を經ずして輕卒に之を迎合するやうなものは總て不健全と言ふてよい、善い事を迎へるにしても、輕卒の態度を伴つたならば、それは不健全である況や惡いものを迎へるに於ては無論不健全てある。所が今日は思想の自由を絶對價値ある如くに考へて、この思想の健全といふ事は、それよりも輕いやうに思つて居る。思想の自由は法律上の壓迫に對して言ふ場合には意義を持つけれども、自由てあるから不健全て宜いといふ事はない、社會の一員として存在する以上、社會に害を流すやうな事は、法律が禁じなくとも、人が咎めなくとも、自らの責任として左樣な不健全な人間として立つのは申譯ないと、自分自ら反省すべきてある。それてあるから自由といふやうな言葉を以て絶對價値のあるやうに考へるならば、是すらも間違つて居る。この思想の不健全といふ事は色々の側から論ぜられる事てあり、今の日本は不健全な現象が澤山に現はれて居るやうに思ふのてあります。

このやうに人心が墮落し、思想が惡化するのは、何が本かと言へば、人間の思想を善導すべき所の社會的の教化を輕んじた結果てあります。總し學校に於て相當な教育を與へても、又その方針が完全てあつても、小學校て學ぶ間といふものは、年の行かない時て、國民教育と言つた所て、小學校の教育てあつて見れば、六年やつた所が、僅かに十三四にして學校を終つて仕舞ふものてある。そこて與へられた知識なり觀念なりといふものは、まだ幼稚な薄弱なものてある。それが學校の門を出て以後は、何等社會的に教育を與へないて放かしてある、それ故民心が頽廢をし、思想が惡化して行くのは無理からぬことてあります。これは學校の教育を萬能と思ふた過ちてある。教育は尊いけれども、この社會を健全にするには學校内に於ける教育のみに於ては、決してその目的を達し得られぬ、吾々自身にして見た所が、學校て學んだそれ

つ切りて以て、何等修養もしなければ、善良な教化も受けないて來たならば、迚も碌なものにはなれなかつたてあらうと考へます。然るに學校に於て教育して卒業さへすれば、それて立派な者ぢや、それから先は放かしておいて宜いといふやうな、社會狀態であつたことが、是が大きな間違ひてある、孰れにしても社會の教化が非常に遲れて居り、缺けて居つたのてあるから、この際この方面に力を盡さんければ、如何に社會政策を打ち立てやうとも、種々な事柄に努力しやうとも、社會教化を擲つた限りには、日本の社會が健全に復歸することは望みないことてあります。

それは人心一と度墮落を始めた時に於ては、恐るべきものてあつて、如何なる善いものがあつても善いものは入らない、墮落して居る人々に對して、自由の選擇を許したならは、その自由の思想は何を取るかと言へば、墮落した精神が之を導くが故に、惡いものを取つて善いものを捨てる、試みに今茲に青年の不良な意味を有つて居る者に向つて、お前はどういふ活動寫眞を見たいかといふ希望を、彼等の自由選擇に任したならば、善き教化を意味するやうな活動寫眞は見たくないと云ふだらう、不良な意味を有つて居る所の墮落した惡漢てあるとか、頽廢したる自然主義のやうな活動寫眞を映すならば、滔々としてその方に集まるだらう、あんなものを見てはいかぬといふことを自ら反省して、さうして健全な方に行くかと云へば決して行きはしない。それてあるから左樣にその人の心の自由を尊重すると云つて、教化を怠り放任するのては、中の中が好く行くものてない、未だ思想の定らない者は、先進者があつて後進者を善導すると

いふこと、即ち教化するといふことがなくてはならぬ。又色々の思想が現はれても、自分の考が低くければ必ずや自分に都合の宜いやうな思想を迎へる、近來起る種々なる思想學說が勢力を得るやうになつて居るが、それはその主義主張が善いから勢力を得るのてはない、墮落した人心に合するやうな思想てあるが故に、滔々として之に趨るのてある、是は吾々の戴いて居る日蓮聖人の言葉にもあります、譬へて見れば鳶は高く天を飛んて居る、ピーヒョロ〳〵と鳴いて飛んて居る、そうして非常に鋭い目を以て地上の何物かを見て居る、それは何を見るかと言つたならば其處に尊とい黃金が落ちて居らうが、金時計が落ちて居らうが、結構な書物が落ちて居らうが、そんな物は彼等の目には決して留まるものてはない、彼等が探して居るものは何處かに鼠の死んだのてもありはしないか、何處かに油揚でも落ちて居りはせぬかといふことを見て飛んて居る、さうして高い所から鼠の死んだのても見つければ、ヒューッと降りて來て之を掴んて忽ち飛んて行つて仕舞ふ。彼等の目に入るものは鼠の死んだのばかりてある。丁度それと同じやうに、人心が頽廢して自利我慾の精神に滿ちて居る時には、その前にどれ程善き感化を與ふべきものを提供しても、そんなものは心に入りはせぬ、矢張り自分の自利心を滿足せしめ、劣等な慾望を滿たすべきものゝみが、心に入つて行くやうになるのてあります。

さういふやうな譯て、墮落するといふと、墮落した側の官能が發達する、犬となつたならば鼻が發達する、犬はこの點に於ては人間よりも偉い、鼻て嗅いだだけて泥棒が此處に入つた、さうして何處へ逃げて

何處の料理屋に上つた、此奴が泥棒であるといふことをちやんと嗅ぎ分けて、警察官を引張つて來て捕まへさせる、實に偉いものである。どんな偉い學者を連れて來ても、こいつが泥棒であるといふことを、嗅ぎ分けることは出來はしない。それと同じて人間が我慾の精神になるとその官能のみ發達して、善いことは少しもその人の心に映らなくなつて仕舞ふ。

それ故に社會が斯樣に墮落せぬ以前に、之を善導するやうに注意して行かなければならない。只今も或る人の話がありましたが、歐米々々と言つて非常に崇拜するけれども、彼等の社會は最早やこの社會的教化を施こすことが出來なくなつて居るといふことである。日本でもう一段惡くなつたならば、斯ういふ教化の會合を聞いても聽きに來はしない、「何も態々この寒いのに詰らない話なんぞ聽きに行くものか、馬鹿々々しい」といふやうなことになる、この邊でもそのやうな人があつたらう、例へば今夜この講演會があるといふので、「君行かないか」と誘つても、「馬鹿々々しい、誰が行くものか、それよりも炬燵にでも入つて寢た方が宜い」といふやうな人が澤山居るだらう。それでも今日は是だけの人がお集りになつたが、この諸君が又さういふ風な考になつて仕舞つたとしたならば、斯のやうな會合を催しても三人か五人しか寄つて來はしない。まだ〳〵日本が善き話を聽くべく人が集つて居る今日は、洵に結構なことである、もう一段是が墮落した時には、教化を受くる者もなくなつて仕舞ふてあらう。

それ故に教化は一日も忽せにすべからざることであり、今日は既に遲れて居るのである、大いに努力して社會的の教化を盛んにしなければならぬ。是は文部省に於ても昨今氣附かれて過般來教化團體の會合がありまして、私も出ましたが、今まで文部當局に於てもその點は十分に考へられて居らなかつた、今度は社會教育課といふものを置いて、その教育といふ言葉も今後は教化といふ言葉に依つて多く働くやうに、「社會と教化」といふ雜誌が文部省内より出るやうになつて居りますが、是は文部省の進歩であり、自覺であると考へて居ります。又勞資協調會あたりに於ても、勞資協調會の事業は是まではストライキが起つた時に、仲裁でもすることのやうに考へて居つた、所が段々に研究をせられて今日は勞資協調の根本事業は資本家及び勞働者に對して精神的の教化を盛んにすることより外ないといふ自覺に立つて、大いに社會教化の活動に進まれたことを承はつて居るのでありますが、是等も勞資協調會の大なる進歩であります。その他内務省に於ても社會教化に就ては一段と力をお盡しになるてありませうが、前年來計畫して居る民力涵養といふことも、その内容は主として社會教化のことてあります、内務省がその點に於ては一番早く自覺して居られたやうに考へます。

左樣にして色々の方面がその自覺に達して來た事は實に喜ぶべきてありますが、どうかこの自覺を徹底せしめたいと思ふ、社會教化は今日必要があつて來年必要がなくなるといふものてはない、永遠に其の必要は存在して居るのてあるから、どうか諸君もこの點に一層の御自覺を御持ち下されて、世の中を善くするには、何よりも人の心を善く導く事に就て、充分の御盡力あらん事を希望いたします。（以下次號）

教化

法華三聖に關する感想

文學博士　井上哲次郎

それて日蓮の當時の活動した事何かはそれは色々書いたものが澤山出て居りまするし、「高僧遺文錄」を始め種々なる書物に多々ありますから、それは今日御話しませぬが、この法華經に就て一つ私は最後に感想を述べたいと思ふ、法華經は今のやうな譯てありまして、世間の人が見て居る法華經とは大分吾々の見る法華經と違ひますけれども、併しそれにしても法華經は多くの經文の中て確に良い經文てある佛教の教理を餘程綜合してある、さうして卷數も割合に多くない、他の經文の中には華嚴經などても大部てある、八十華嚴といふから中々大部數てあります、隨分無駄な所もあるやうに考へられる、法華經は割合に卷數が少い、さうして餘程大事なことが說いてある。而もその說いてある事は大乘佛教の髓と言つても宜いやうな所が見える、今日から見ると法華經といふものは飾りが多い、その飾りを直ぐ正味と見てはいけない、この飾りも飾りとして、それは或る時には飾りも必要てあつたらうと思ふが、吾々に取つてはこの飾りは必要はない。すつかり飾りを除けてその下に含まれて居る所の法華經の眞意を攝んて見ると、洵に貴重なる教が傳はつて居るのてあります、それて華嚴經、楞伽經、涅槃經、勝鬘經、維摩經、樣々な中々良い經文がありましても、この中て法華經は餘程要領を得て居る、確かに釋迦の說法世尊の說法——多く世尊といふのは釋迦のことを言つて居るが——てある。さうして最後に一寸大事なことを御話したい、最も是が重要な點てありまして是だけはどうぞ御聽取り下さるやうに願ひたい、それは法華經といふ經文は一體どういふ標題の經文かといふと、「妙法蓮華經」、この妙法を蓮華に例へてある、蓮華の如く美しい、正味は何てあるかといふと妙法てある、妙法てあるけれども妙は法の形容詞てある、法は如何にも何と說いたら宜いか、實に不思議なことに考へられる、立派なものてあるから妙はこれを形容したので、實は法の經文、梵語のフンダリーキヤ、ストラと云つて宜い、妙は形容、蓮華はその譬て、蓮華が泥の中から出て立派な花を咲かしたそれを譬へたのてある、だからそれは蓮華又は蓮華經と云ふても宜い、が正味は法て蓮華經といふよりも法經、法といふことが大切て所謂ドラフマ、ストラと云ふべきてあらうと思ふ、譬の方から言へばフンダリーキヤ、ストラてあるけれ共、正味の方から言へばドラフマ、ストラと稱すべきてある。法とは何ぞや、諸君に極く分り易く私の感じて居ることを御話して置きます、法といふことを佛法ては說きます、今私は「佛法」と言ひました、佛教と言つても宜いけれども佛法と言ふ、是が儒教や何かは儒法とは言はぬ、儒教とは言ひますけれども儒法とは言ひ

ませぬ、道教も道法とは言はぬ、佛教だけは佛教と言つても宜いけれども佛法と言ふ、又その教を說くことを說法と言ふ、法が主てある、この法といふことは是が佛教の心髓骨子てある、法なる言葉は昔からある、波羅門教の側にも大切なものてありますが佛陀の出ます時は諸種の學派が起つて居りますけれども、それまてになかつた所の法の考を取りまして、さうして之を更に佛陀自身の考て一層哲理的に解釋して來た、佛陀の說いた法が最も勢力を得ましたのは、是が教理として徹底的に說かれてあつた所から佛法の方が世界的に擴がつて來ました、東部諸方に擴つたのは皆佛法の法てある。この法なるものは何かと申しますると、中々是は容易に說けませぬが、私が今日說き得るか得ないか分りませぬけれども、この法なるものは希臘の言葉て言ひますと「ロゴス」てあります、法は即ちロゴスてある、支那の方の儒教道教の方て言ひますと道てあります、儒教の道、道教の道、儒教と道教の道の意味は違ふけれども、孰れも皆ロゴスを說いたもので、道なるものは永遠不變のものてある、道に從はない人は道德的生活をなすことは出來ない、人格者たることは出來ない、道はカントの所謂無上令法てある、カテゴリーインペラティヴ、道といふものは絕對てある、人間の道に從つて行かなければ人間たることは出來ないといふのが儒教てある、道教は少し說き方が違ひますが暫くそれは措きます、兎に角簡單に言へば儒教の道は即ち印度て言ふ所の法てある、唯その儒教て道を說き、佛法て法を說く、その說き方が違つて居りますけれども、根本概念はやはり希臘の哲學て言ふ所のロゴスの說き方てある、それだからしてそれは非常に大切てありまして、儒教の側ては道といふものの爲には、人間と道といふものを比ぶれば道の方が貴い、道といふものの爲には命を捨てゝも道を全ふしなければならぬといふのが儒教の精神、「志士仁人は生を求めて仁を害することなし、身を殺して以て仁を成すなり」道の爲には何時ても命を捧げる、道は貴く人間は何てもない、道の爲に身を捨てるといふことは人間の人間たるその根本を盡すことてある、それは非常に立派な人格者てある、道を離れては人間たることは出來ない、是が儒教の考てある、楠公が湊川に刺違へて死なれたといふことは、武士としての道に殉ぜられた、武士としての道を守られたので、こんな場合に命を捧げないのは武士としての道てない、立派な堂々たる武士としての最期てある、こゝは死ぬべき場所てあるとして道を守つて彼處て逝くなられたからして、やはり戰は破れても武士としては立派な面目を保たれた次第て、儒教の道なるものは絕對妙法、無上妙法、カントの所謂カテゴリーインペラティヴてある、どうしても備はらなければならぬ、佛教の法もそれてあります。「法に依つて人に依らざれ」と日蓮も屢々說いて居る、法の爲に身を滅す、況や佛法を信ずる者は佛法の法の爲には欣然として身を犧牲に供する、法の爲に身を滅すといふのは、志士仁人身を殺して仁を成すの精神とどこに相違があるか、斯ういふ精神は何處ても文化の進んだ所には並行して發達して居るのてありまして、その話は今日は出來ませぬが、唯玆に法華經の內容に觸れる所があるからそこをどうしてもお話しなければならぬ。

佛教といふものは千里の數なりと言つて居りますが佛教は千里の數だ、私は千里所てはないと言つて居りますが、さうかも知れませぬ、佛教は經文も澤山あり、それに關係した書物も澤山あるから、千里の數か無際限の數かといふのてありますが、要領は何處にあるか、佛教の要領は何處にあるかといふと、佛教の專門家は別と致しまして、少しばかり佛教を聽いた人、佛教の經文を一二讀んだ人は何處に佛教の要領があるか、まるて分らぬ、益々聽けば益々分

らぬやうになる、併ながら玆に大事なことは佛教の心髓骨子ともいふべきものは法てある、法といふことを忘れては佛教を理解することは出來ない、法といふものがなかつたならば佛教は成立しませぬ、佛陀の說いたのは法てあります、佛陀が佛陀となつたのも法に依つて成られ、法に依つて始めて佛陀の佛陀たることが出來た。佛教てはこの法をいろ〳〵使ひます、私は五通りにこの意味を分つて居ります、佛教に使ふ所の法の意義は少くとも五通りに分れて居ります、その意義を一々御話することは煩しいから今日致しませぬ、それは哲學雜誌にも書いて出して置きましたから、此處ては御話致しませぬ、併ながら唯二つの大きな違ひだけは諸君に御話する必要がある、諸君も御承知てありませう、この法なるものは一切萬法といふ時のさういふやうな時の法てあります、一切萬法、斯ういふやうな言ひ方も致すのてありますけれども、一切萬法といふ時の法は總てのものといふのて、大きなものてあらうが、小さなものてあらうが、新しいものてあらうが、古いものてあらうが、そんな區別はない、ありとあらゆる法を稱する、哲學上の言葉て言へば、一切の現象、その一切の現れを法といふ、總て現れて居るものを法といふ、けれども總て現れて居るものは生々滅々定まらぬ、或は生じ或は滅し、或は增し或は減り、生滅增減を免れない、即ち變化を免れない、變化しない物は一つもありませぬ、生じたり滅したりして居る、生滅增減を免れまする物は一つもない、隨分長く保つて居る物と早く變る物とある、その長短のことはあつても、ありとあらゆる物は悉く生滅增減を免れない、その生滅增減を免れぬ現象を法と言つて居ります、忽ち現れ忽ち滅して居る物を法と言つて居る、けれどもそれはさうやつて居りますけれども又一方に於て、違つた方面に於ては法なるものは決して滅しないものてある、不增、不減、不生、不滅のものを言ふ、寸分增しもしなければ減りもしない、永久變らぬ所の永遠不變の本體を法とも言ふ、是は即ち眞如實相てある、眞如實相が即ち法てある、それは諸法實相とも申します。諸法實相に就て一寸御話致しますれば、諸法實相てありますからやはり萬法と同じやうにありとあらゆるものは變化して行きますけれども、それの本體は永遠不變のものてある諸法の本體たるものは永遠不變てある、それてありますから一方に於ては變化なきものを法と言ひ、一方に於ては永遠不變のものを法と稱して居りまするから矛盾のやうてあるけれども、矛盾てはない、矛盾てないと申しまするのはありとあらゆる變化する物は變化して居りますけれども、皆法に依つて居る、法に依らざる物といふは如何に變化するものと雖も無い、今日自然科學に依つても同じこと、自然科學の方ては今日自然の法則とも言ひ、理法とも申して居りますが——理法は少し分りにくい、自然法則と言つたら宜ひてせう——この自然法則に依らないものはない、如何なる自然界の現象も自然法則に依つて居ないといふものはない、自然法則は不變化的のもの、けれども自然現象は生滅增減止むことなきものて、この生滅增減止むことなき現象を貫いて永遠不變の自然の法則てある、それと同じやうに佛教はそれを說いて居る、一切萬法は生滅增減止むことなきものてあるけれども、その本體は變らない、その本體あるに依つて一切の現象といふものが現象として生滅する、如何なる現象と雖も法を離れてあるものはない、即ち諸法實相、あらゆる法の絕對本體なるものは永遠不變てある、それはその通り、諸君に之を分り易くお話しすれば、玆に豆粒を一つ例に取ります、何ても宜いけれども豆粒といふものを吾々は之を無くなすことが出來ますか、本當の意味に於て無くなすことが出來ますか、どうしても無くなすことは出來ない、豆粒を燒く、無くなつたかといふ

と一部分は灰となつて殘つて居る、唯一つの豆粒位と云つて輕んずるけれども、その豆粒位が無くならぬ、豆粒一つさへも有を無にする、有るものを無くなしてしまふといふことはどうしても出來ない、如何にして出來ますか、不可能であります、唯、形を變へることは出來る、色々打碎く、粉になつて殘つて居る、原子として無くなつたものではない、どうしても人力を以て一つの豆粒を無くなすことは出來ない、玆に意味がある、その一つの豆粒を拵へることが出來ますか、出來ませぬ、豆を拵へるといふのは種を以て植付けることで、有るものを自然の力を借りて發生せしめることである、何も無い物を作ることが誰が出來ますか、やつて御覽なさい、到底出來ない、一つの米、小さい米粒、米くらゐと言ひますが、その米を無くなすことが出來ますか、生ずることが出來ますか、到底出來ない、それでその一つの豆粒、一つの米粒と雖も一方には永遠不滅の方面がある、この世界に於てありとあらゆる物は實に生滅增減止むことなき現象であり、一方に於て永遠不滅なものである、不增不減不生滅、支那では「一石も轉ぜず」といふ、一つの石も轉じない、けれども世界を通じての眞理は一つの指から、一つの指に於てある所の眞理は世界を通じてある所の眞理、吾々人間は世界の一部分で、世界の眞理は吾々の中にあるそれを知らないのは迷ひの爲である、非常な恥辱なのである、それが吾々にある、即ち今豆粒だとかいふものは永遠不滅と申します、一方に於ては變りませぬけれども、一方に變化を免れぬ、變化は免れぬが、どうしても變化しない方面が吾々人間にもあります、況んや豆粒米粒以上の深遠なる意義ある人間である以上には、尙更それがなくてはならぬ、それが即ち法華經に說く所の妙法の法である、妙法の法だけは土臺を如何ともすること能はざるもの、永久不變に世界にある所の法である、佛陀も之を變ることは出來ない、法は永久不變のものである、この法なるものは何處にあるか、吾々人間にある、どういふ風に吾々人間にあるかといふことを佛敎では餘程巧妙に說いて居ります。

それはどういふ風に說いて居るかといふことを一寸分り易くお話し致します、即ち佛敎の涅槃經に說く所の「悉有佛性」、悉く佛性有り、一切衆生悉有佛性、吾々人間には佛性があると說いて居る、佛性といふことは中々簡單には說けませぬけれども、先づ斯う言つたら宜い、佛陀の性質がある、後でもう少し分り易く言ひますが、佛陀と同じ性質がある、釋迦如來と同じ性質がある、又佛陀に成れる性質、斯う考へる、即ち佛性が具はつて居る。涅槃經、梵網經、いろ〳〵な經文に「一切衆生悉有佛性」といふことが說いてある。吾々の佛性は何處に佛性があるだらうかと斯う考へます、所が一切衆生悉有佛性といふことはどうも今日になつて考へると、哲學上から考へても、今日の心理學上から考へても、悉有佛性といふやうなことは事實ある。唯、之を解釋の仕方が時勢に適應するやうに解釋して行かなければ分り兼る。そこで悉有佛性といふことは諸君は儒敎の方から說けば分り易いであらうと思ひますから、儒敎の方の側から少しばかり說いて見ませう。儒敎の側で悉有佛性をどう說いたか、儒敎にも同じことがある、同じことのあるのを世間では知らないで居ります、どういふ風な同じことがあるかといふと、儒敎の側では性善說を唱へて居ります、「性は善なり」、是は孟子も言うて居ります、人の性は善なり、人の性は本來善である、甲乙丙丁いろ〳〵な人があるけれども、皆に通じて、ありとあらゆる人間を通じて性善といふ方面がある、萬人同性、一人づつ顏も違ふし、性質も違ふ、違ひながら如何に違つても人間としては必ず性は善といふ方面がある、斯う儒敎では說いて居る。性善といふ方面がなければ敎育も駄

目てあり何も出來ませぬ、人間の發展も不可能てある、けれども性善に關する方面がある。この性善說といふことは斯ういふことを意味して居る、性善といふ側は變らない、如何に人間がいろ〳〵他の點に於て違つて居つても性善といふことは共通して居る性善が或る人には餘計ありませう、或る人にはそれ程ないといふこともありませうけれども、性善といふことは多少無いといふことはない、まるてないといふ奴はそれは人間てはない、人間として必ず性善といふものはある。その性善がある以上はそれは共通性てある、總ての人間を通じての共通性てある。さうして儒教ては誰ても人は修養に依つて聖人になれると考へる、聖人は吾々の中に具つて居る、性善の所を極度まて修養して大きくなれた人てある、性善をその善を人格の中に見出したのが聖人てあると斯う考へて居る。性善てあるからして誰ても皆立派な賢人になれる、賢人になれば尙ほ進んて聖人になれるといふのが儒教の考てある。それだからして後には儒教ては巧妙に說いて居ります、聖人の心は昔も今も同じい、東も西も同じてある。陸象山の言つたことは面白い、「東海に聖人出るあり、此の心同じきなり、此の理同じきなり、西海に聖人出るあり、此の心同じきなり、此の理同じきなり、南海に北海に聖人出るあり、此の心同じきなり、此の理同じきなり、百世に聖人出るあり、此の心同じきなり、此の理同じきなり、千百世に聖人出るあり、此の心同じきなり、此の理同じきなり」。吾々の心の理といふものは、昔の聖人も、後の聖人も、東の聖人も、西の聖人も、皆心は同じてある、その理といふ方面から言へば、總ての聖人の心は皆同じ心てある、吾も皆その理を具へて居る、この理は聖人の理と同じものてある、我が心の修養さへすれば立派な聖人になれると考へる。王陽明は人の胸の中にも誰の胸の中にも聖人が宿つて居ると說きます、聖人が宿つて居る、聖人になれる、小さな聖人は誰の胸にもあると斯う說いて居ります。それはそのやうに說いたのは儒教の性善說を說いたのて、佛教て言へば一切衆生悉有佛性てある、誰にも佛性は具つて居る、佛教も後には性惡說が出ましたけれども、併ながらもとの原始佛教の精神は性善說てある、誰ても佛性がある、佛陀が佛性を缺いたならば佛陀たることは出來ない、吾々が佛陀の教を聽いて、佛陀の教の大事な所を聽いて感ずるのは吾々の佛性に依つて感ずる、吾々は佛性がなければ佛陀の說いたその教を本當に感ずることは出來ない、我が佛性を以て彼の佛性に依つて說いた所を感ずるのてある、是は古今を通じ、東西を通じ、時間、空間を超越した永遠不變の眞理てあります、一人だけのものてはない、萬人を通じて變らぬ所のものが、是が即ち法てあります、是が即ち永遠不變の法てある。佛陀は初め迦毘羅城の悉太太子てある、その歷史上の人物悉太太子は疾に亡くなられてありますが、悉太太子としては歷史上の人物てある、けれども、悉太太子は或る時期に於て大悟徹底した以上は佛陀てある、悟りを開いた、覺者を佛陀といふのだから、悟りを開いた以上、大悟徹底したる以上佛陀てある。併し大悟徹底とは何ぞや、大悟徹底といふのは吾々の中にある所の佛性を本當に最高度まて擴大しまして、それと一體となつたと言ひ得られる、言へ換へれば法を體顯した、斯う言つて宜い、この法の體顯てある、體顯は體に顯して來たのて、法の體顯てある。法を體顯した以上は唯歷史上の人物てはありませぬ、佛陀といふのは唯歷史家が歷史の上から研究しても、佛陀の眞相は盡すことは出來ませぬ、佛陀の佛陀たる所以は法を體顯したにあるから、唯歷史家が歷史の上から研究しても佛陀の眞相を明かにすることは出來ない。そこて法なるものはそれなのて、古今を通じて變らぬ所のものてある、吾々は悉く佛性を具へて居る、佛性といふものは皆誰ても

有つて居る。この佛性なるものをいろ〳〵に唱へます、どういふ風に唱へるかといふと、佛性或は法相とも申します、或は實相、法華經では諸法實相とある、或は眞如、或は華嚴經では法界、楞伽經を初めいろ〳〵な經文には眞如と說いて居ります、法華經には諸法實相とある、法華經の說く實相は妙法の法である、金剛頂經のやうなものには法相、華嚴經の法界も、涅槃經の法相も皆同じものである。さういふものを明かにしましたのは、即ち大乘佛教になつて益々盛になりましたけれども、皆佛陀の考である、佛陀の考から段々さういふ工合に發達して來ました。それでこの佛性といふ方面から言ひますると、吾々人間といふものは丁度波のやうなもので、千波萬波定まらないもの、幾らても波は起つて少しも定まらないものであるけれども、併し總ての波は均しく水であると同じやうに、吾々人間は生々滅々、定まらないものであるけれども、この人間を通じて變らぬ所の法界なるものがある、佛性なるものがある。この佛性は佛陀の佛性も吾々の佛性も同じい、將來の人の佛性も同じい、この佛性は一つなので、自分を超越して居る。そこで如來は無限で、未來に拘らず何時でもあると斯ういふ風に考へるのは、空間を超越し、時間を超越して居るからで、超越した哲理がそこにある。そこでこの時間に關はるといふのは、生じたり滅したり、又生じたり滅したりするものは時間の關係がある。何時も變らぬ、永遠不變といふものには時間は關係して居らう筈はない、時間を超越して居る、常住不滅といふものは時間を超越して居る。この佛性、法相、眞如、法界、斯ういふものは同じものを意味して居る、それは變らない、それを說いて、法を體顯した佛陀が即ち法身である、法身は法を體顯した佛陀である、この法を體顯しなければ佛陀たることは出來ない、法を說いて體顯して始めてあのやうな教が樹てられる、佛陀は八萬四千の法を說いて、千年經つても二千年經つてもその法愛が變らないといふのは、永遠不變に體顯してこの法を說く所に於て非常な大きな影響が及んで來る。カントは行ひは萬人の手本となるやうになくてはならぬ一々行ひは萬人の模範となるやうな行でなければならぬと言つたが、それは儒教の側に於ても非常に說いて居る。「君子は動いて而して天下の道となり、言うて而して天下の則となり、行うて而して天下の範となる」と言うて居る、それが聖人である。聖人は道を體顯して居る、道は佛教で言ふ所の法である、道を體顯した以上は永遠不變の意味がそこから出て來る、その道を體顯して道を說いて居る、道は永遠不變なものだから聖人の說いた道は中々滅しない。佛陀も同じこと、佛陀が法を說いた、この法と一體となり、法を體顯してその法と分つことの出來ないこの本體を法身といふ、法身佛、この法身佛は即ち久遠佛でありまして、法身佛は何時も變らぬ、過去、現在、未來、時間に關はらない。之を法華經で說けば、法華經の壽量品に說いて居る久遠佛、即ちこの法身佛、即ち今申したやうな諸法實相、この實相を說いたのである、吾は涅槃を示すけれども、何時の世に於ても說いて居るぞと斯う言つて居る、あれは譬であります。吾々皆この佛性に於て說く所のこの法は、即ち過去に於て佛陀が四千年以前に說いたと同じ譯のものである、吾々には法、即ち法心がある、吾々自身には法相あり、佛性あり、法界あり、眞如がある、吾々自身は生々滅々定まりなきものであるけれども、永遠不變の法あることを自覺し、この法に依つて吾々は進んで行かなければならぬと思ひます。法華經といふものゝ大切なることを聖德太子、傳教大師、日蓮聖人、皆力說されましたが、その大事な精神はこの法の意義にある、この法の意義を等閑視すれば、この三聖の事業といふものは意義のないものになる、非常に法華經といふものをして忘るべ

からざるものとして來た所に意義がある。三聖の功績といふものが何處にあるかといふと、法の意味を能く理解し、將來人間の立場を明かにするに佛教の法の精神を參酌した所にあると思ひます。色々これに就てお話したい事はありますけれども大分込入つた事になりましたから、今日はこれで失禮致します。

佛教と政道

本多日生

それから常に社會の平和及び幸福を思ふが故に、四事攝といふことを勸められて居るのである、是は四つの事柄に依つて世の中が親和するので、攝とは平和幸福を意味する言葉である、神の攝理と言うたり淨土に攝取せらるると言つて、誠に優しい意味である。丁度親子の如く夫婦の如く親族の如く、人情が厚くなつて惟れ信惟れ義といふが如き敦厚の風を爲すを攝と云ふ。その第一は親愛の精神から出た施してある、惠施と言つて居るが、此の惠施とは人に錢を施し米を施すといふばかりではない、智慧を施すことも力を施すことも、溝を渡る婆さんに對して手を引いてやるのも、皆惠施である。正しい政治的の運動も惠施であれば、轉輪聖王の活動も惠施であり、金持の米を施すのも惠施であれば、親が子供を育てて行くのも惠施である、今日の社會事業も皆惠施である。人間は惠施を勵まねばならぬ、權利の要求と正しく反對のことである。現代人の叫んで居るマルクスあたりの思想とは正反對の思想を惠施といふ。この惠施から社會が成立つのである。第二は同事といふことを說くので、世の中を善くして行くには調和を保たなければならぬ、唯自分の考をのみ推切つて行けば、どうしても衝突が起る、互に讓歩するのが大事である、前に進んだ者は後から來る者を導いてやる、それには後から來る者の性格に應同すべきで、親が子供を敎へるにしても、それに應じてやらなければならぬ、社會もやはり其通りて先進は後進に應同して導くべきである、この同事といふことが調和作用となる譯である。第三は利行、利行とは何かといふと他を利益するので、要求ではなくして社會を利し、他人を利し、國家を利し、文明を利し、世に貢献するを云ふ。第四は等利と言つて平等の精神である、博愛の精神である、自分の親しい者だけを利して疎遠な者を見捨てるのでない。自國民を利し他國民を害するのではいかぬ、白色人種の爲にして有色人種を壓迫するのではいかぬ、一切衆生を平等に利するを等利と云ふ。此の惠施、同事、利行、等利を四事攝と云ふ、この四つは釋尊が人生を改善する所の大敎化として力說せられたのである。

それから更に四護といふことを說く、此の四つのことで世間が護られ文明が護られて行くといふのであつて、慈、悲、喜、捨の四つを言ふのであります。慈といふのは人々の幸福を增進してやることを意味し、悲は苦痛を除いてやるのであつて、言葉で言へばそれだけのことでありますが、恰も父の如き親切母の如き親切を指して慈悲と言つて居るのである、困難を突破して救ふ働き、それから優しい方から同情して行く働き、どんな大事でも引受けて助けてやらうといふ男性的な親切もあれば、氣の毒なことぢやなと思うて優しい精神から涙を流して慰めてやるやうな溫かい親切もある、さういふ意味を慈悲と云つて居る。これは簡單に說明して居るのではないので、餘程詳しく能く說明されてある。それから喜と

いふも妬み、恨み、呪ふといふ精神の丁度反對であつて、他人の幸福を喜び世人の榮えて行くことを喜ぶのである、其の喜びは大きい所まで延びて行く、國家の發達を喜ぶ、唯自己の直接の利益だけしか喜ばないといふやうなことではいかない、他人の幸福を喜び、社會の幸福を喜び、國家人類の幸福を喜ぶ、さういふ點まで及んで成べく廣き範圍に於て、成べく永遠に及んで喜びの精神の伸びるのが、人格の善き人と言うて居るのである。其の喜びの實例としては、釋尊自ら手本を示して、非常に大きな喜びが說いてある。それを裏より考へて見ると、恨み、妬み、憎しみ、嫉合ひてあるが、さやうな淺間しき事に流れぬやうに、此の世間を護る原則として、この喜の德を勸說されて居る。それから捨といふは、囚はれない精神といふことで、何か自分で私に引つ掛ると、公平な觀察を失ふ、所謂鹿を追ふ者は目に大山を見ずで、私欲の精神に囚はれると正邪が分からなくなる。執着や拘泥や、さういふことを無くして、何時も光風霽月の精神を持つを云ふ。釋迦が例を擧げて居るのは、或る男が他所に行つた、所が豚の糞が澤山にあつた、肥しにすれば宜いと思つた、幸ひ大きな籠があつたからして、其の乾いた豚の糞を入れて頭の上に載せて、雨方の手を以て確かり捉へて歸つて行くと、生憎く雨がふりだした、さうして汁が流れて來るけれども、折角持つて來たものだから捨てるのも惜しいと思ひ、捨ずに其儘雨の中を持つて歸つたものだから、頭から着物から皆豚の糞汁で汚れてしまつた、人間が或る事に囚はれて居ると、丁度そんなやうなものであつて、何の仕事も出來ないから、そこでそれを捨てて、雨方の手を明けて、善い仕事をしなければならぬ。人は多く價値なきことに精神を囚はれて居るから、意義ある活動が出來ない。儒者はこの意義を知らないで捨の字に對し淺薄に考へて、佛教を消極の教と思ふたのである、又喜捨といふは寄附金のこと位に考へて居る者がある、元はお寺の出來るのも人の喜び自分の喜びであり、世俗の愚な事に囚はれない淸い心の表現であるから、喜捨と云つたのであらう。或る相當な人が今日は社會政策が大事ぢや、そんな喜捨といふやうなことで行くものではない、やはり社會政策、法律の制定に依るべしと云ふたが、此のどうも社會政策とか法律の制定といふことが一番善い事のやうに思つて居るが、第一人格の根本觀念を直さなければならぬ。釋尊は世を護る原則として此の慈悲喜捨を一般に奬勵された、この四無量心の實行が菩薩行の骨子であり、この精神的運動が本となつて、現實の社會を善くし國家を善くし政治の目的を達成せしむるのである。慈悲喜捨といふが如きは坊さんのやることで、政治家の關する所でないと思ふて居るならば、斷じて幸福なる社會は實現しまい。法律主義で行けば結局社會主義と喧嘩するので、一方は法律に依り武力に依つて之を鎭壓せんとし、一方は險惡なる思想を宣傳して之に對抗する、さうして何れかがやられるのである。武力の强い場合には社會主義を葬むる、社會主義が勢力を得れば非常手段に依つて國家を葬むるので、何れにしても爭鬪相續ぐ世の中となり、詰らないことぢや、それ故第一に人々の根本の思想を導いて善き社會を建設すべきではなからうか。今日の勞資の爭ひの如きも丁度源氏平家の戰と同じで、馬鹿なことをやり居るのである、佛教の方が積極的であり男性的である。

この四護は與へる方から云ふのでありますが、受ける方に就ては報恩の觀念を敎へたのである、四事攝と言ひ四護といふ方は與へる意味であるし、知恩報恩といふは、受ける者の心得を說いたのである。慈悲と報恩といふは、與へる方と受ける方とから言ふのであり、一人に就ても兩面があつて、親に對しては報恩であり、子に對しては慈悲である、社會に

對しては報恩の方面と慈悲の方面と二面が連結して行けば、立派な社會が出來る譯である。この報恩のことは唯だ大乘佛教に限る譯ではない、原始佛教の根本から說かれて居るのである、其の最も有力なる證據としては增一阿含經に

當に學ぶこと師子王の如くにして羊の如くなること莫るべし、小恩尙ほ忘れず何に況や大恩おや。

是が原則であつて佛教徒は師子王の如くでなければならない、それは恩に報ゆる爲には活動して行かなければならぬ、唯從順といふことで羊のやうになつて居つては恩を報ゆることは出來ない、小さな恩即ち雨降りに傘を貸して貰うたことでも、その恩を忘れてはならないので、況や大きな恩即ち親の恩とか國の恩、社會相互の恩、天地の恩、師匠の恩、夫婦の恩といふやうなことは、大恩である、この大恩は忘れてはならない。雜阿含經には印度傳來の思想である狐に就ての話がある、是は最も面白いことと思ふ、釋尊の如何にも口から出た說法と思ふ、青年に敎へられて居るのであつて、お前達野狐が體に疥癩が出來て、さうして泣き叫んで居る時、吾先に爭うて行つてさうして狐に藥を附けてやるであらう、それは狐が其恩を知つて必ず良い物を齎し來ると思ふからであらう、美しき女を嫁に呉れるか、錢を恩はぬ所から齎して呉れるか、さういふやうな幸福が來る、二錢か三錢の膏藥を狐の疥癩に附けてやれば、絕世の美人が自分の妻になるとか、寢て居る中に千兩箱が來るとかいふやうなことを考へて、吾先にと狐の疥癩を癒してやらうとするのではないか、是は禽獸すら恩を知つて居るといふことがお前等に考へられて居るからである。然らばお前達は人間ではないか、恩を忘れて宜いか、小恩尙ほ忘れず況や大恩をやと說かれたのである。恩を忘れないといふ原則から諸恩といふ思想が出て居るので、中阿含經にも、

恩を無みし恩を知らずんば我れ彼を愛せず。

我れといふのはお釋迦樣で、恩を忘れてしまふやうな人間は大嫌ひぢや、其の代りさういふ恩を忘れるやうな人間はお釋迦樣をも嫌ひであらう、嫌ひでも宜い、そんな者から好かれやうとは思はぬと說かれて居る。尙ほ增一阿含には恩の報じ難きを知れよといふことを說かれて居る、唯報恩と言つても親の恩にしても其の恩に報ひつつ進むことは出來ても報じ終つたといふことは中々言へない、國の恩にしても國に報じつつ行くので、其の報じ難きを知らなければならぬ、其高大なる山よりも高き海よりも深き恩に報ひんとしても、どうして、それが報ひ盡すことが出來るか、出來ぬてはないか、そこに益々努力して行かなければならぬといふ意味を、極力說き論されて居るのである。

七、產業と道德

それから先に申した產業と道德の關係でありますが、是も釋尊は到る處に說かれたので、一つの原則がある、行欲に二種ありと中阿含經に說かれて、慾を以て働く人間に二通りある、唯慾のみ突張つてさうしてそれを善用することを知らないものと、慾から出て金を儲けて其の金を善用するものとの二種である。

若し如法にして財を求め　自身に勤めて得る所を
×他に供し及び自ら用ゐ　亦施を以て福と爲さば
二俱に皆德有りて　行欲に於て最上たり

行慾といふのは商賣をしたり錢儲けをする所の人間の慾望に依つてやつて居ることである、其のやり方、それは正しい方法に依つて錢を儲けて、自分で勤め勵んだ努力に依つて得たる所のものを他の者に供し、又其の得たる一分を自分も用ひ、さうして得たる金錢は意義ある所に施して行く、斯くすれば他を益し自分を益し二者共に幸福を受けるのである、それが錢儲けをする根本の心得であると說かれた。

それから雜阿含の方に原則として、錢儲けは先づ仕事に能く勉强して所謂研究して其の業を學ばなければならぬ、それから其の方法の宜しきを得て金を儲ける、儲けたものは四つに分けて、其の利益の四分の一て生活を立てて、四分の二は資本に廻し、四分の一は貯金してそれて不時の災厄に備へなければならぬ、商賣は色々あるけれども儲けたら錢を善用しなければならぬ、錢を儲けたからといつて、守錢奴となつてはいかぬ、蜂が花に集つて蜜を吸ふ時でも花を損ぜざる如きものてある、又蟻が物を銜へて穴に行くけれども、自分一人が食はふと思はないて働く、蟻は其の點に於て人間よりも尊いのてある、一寸した食糧を見付けたならば、そこてむしや〳〵食はぬ、直ぐ銜へて其の儘穴の中へ持つて行つて共同の食糧に供する、行成り銜へて行つて些つとも慾張らぬ、それて釋尊は金を儲けても、儲けた金をそれを自分の物と思うてはいかぬ、それから其の金の保存方法も色々詳しく說いてあるのてある、釋迦は金の事に關しても巨細な敎を示したのてあつて、左樣にして行慾に就ては、施を奬勵すること實に至れり盡せりてある。之を施香第一と釋迦は說いて居る、人間の道德を香に喩へて、東から風が吹けば西に居る者に香を送り、西から風が吹けば東に居る者に送り、順風逆風共に其の香を送ると言つてある。其の香の中に於て施香が第一と說かれた、それは波斯匿王に對して釋尊の敎へられたことてある。波斯匿王は今まて自分は佛敎を信じて居るが故に、佛敎の坊さんにのみ施しをして居つたけれども、今後は異敎の輩にも施したいと思ふけれども、私はさういふ異敎の者が來て物を呉れと言うても、どうもやる氣になれない、どうも心から施してやりたいといふ氣にはならないと、波斯匿王が釋尊に申上げた、所が釋尊はそれを誡めて、

大王よ是の念を作すこと莫れ、

と誡められた、何故かと言へば一切衆生は食物に依つて生存して居るのてある、それ故に諸の善行の中に施香が最第一てあると說かれた。又增一阿含には施に就て五德を說かれて居る、

施（命、色、力、安、辨）

即ち命、色、力、安、辨の五德ありと云ひ、此の施に依つて生命を存續し、又それに依つて身體を維持し、施よりして力が出て、安定が得られ、故障が起つてもそれを排除するのてある、若しも食を失へば故障を排除する作用が無くなり、精神の安定が無くなり、力が無くなり、體の色が衰へ痩せてしまつて、終ひには死んてしまふ、だから施は命を人に呉れてやるのてあり、實に大功德てあると敎へられて居りますが、今日やかましく言う所の生存の問題とか、安定の問題とか、生活問題は、釋尊は痛切に感じて居られたのてある。この敎化を迂遠と思ふ人もあるけれども、迂遠と思ふは世の人々の人格が墮落したからてあつて、其の人格の墮落してしまつた以後に於て、縱令ひ法律的經濟的にやつても善くは行かぬ、止むを得ぬから法律的にやるけれども、到底善くは行かない、政治の根本問題は人を左樣に墮落せしめない事てある、道德敎化を失つて刑罰の力と金錢の力に依つて結付けるやうになつては、如何なる方法を執つても方便的てあつて、結局理想的の社會は實現せられない、これを家庭に就て考へたら能く分る、親子、夫婦、兄弟、奉公人、それを道德的に結合することを忘れて、法律的利害的にやつて行くと、理想的には行かない、社會を今のやうな法律的經濟的刑罰的に導いて、人心を統率せんとするは、既に第一着の敎化を誤つて居るものてある、故に釋尊が今日に出現せられても、必ずや此の點を獅子吼せられる

てあらう。

八、釋尊の國家觀

次に釋尊の國家觀を申上げて見たい、佛教は國家の事に就て、迂遠なりと思うて居る人もあらうけれども、頗る徹底した國家觀を有するのである、儒教の國家觀には不透明な所があり、西洋の學問も國家に關する理想觀念が不透明である、それ故に今日國家否認論となり、社會主義などが起つて來るのである、西洋の國家は大體初めから宗教と分離したやうな國家である、只今申した道德と離れ宗教と離れての政治である、所謂低級なる國家である、そこで國家觀が甚だ淺薄になつて居る、近頃漸く少しづつ國家の理想を訂正すべく運動が起つて居る位である、所が佛教の方は始めから能く其の點が考へられて居る、增一阿含經に

家のためには一人を忘れ、村のためには一家を忘れ、國のためには一村を忘る、身のために世間を忘れんや。

と說かれて居る、是は一國の爲には家でも村でも皆犧牲にしなければならぬ、然るに一身の利害に迷うて世間即ち國家と文明とを忘れてよいかとの誡めである。それから國家觀念を最も能く示して居るのは、跋耆の國に就て國家不衰の七法を說かれた、是は阿含經の到處に出て居るし、大涅槃經にも出て居る。長阿含經の中に佛が阿難に話されるには、汝は跋耆の國人が數々相集會して正事を講義するのを聞いたか、正事といふのは政治で即ち政の會議であります、大事に當つては國民を集めて討議する、所謂萬機公論に決すと言ふ意味である、それを汝は見たかと聽かれた時に、阿難が言ふには左樣であります、數々跋耆の國に於ては大事な問題に就て國民會議があることを承知して居ります、然らば其の國の長幼の間に秩序があり禮儀があり、左樣な美風が益々發達しつゝあるかどうかと言はれた時に、阿難が申上げるには跋耆の國は君臣相和し上下相誡めて決して秩序を破り不敬なことをしない、醇厚の俗が發達して居りますと申上げた、それから第三には國風を重んじ歷史的の美風に違はぬやうに、父母に孝に師長に敬といふやうな、道德宗教を重んじ、家庭の道德が尤も純潔である、それて人々が交はる間に於ても風俗は敦厚であり、宗教家を尊敬し、懈ける者は無く、勤勉の國民であり、斯樣なことを汝は聞いたかと言はれた時に、阿難は悉く其のことを承つて居る、と申上げた。それて是は誰が教へたかといふと、釋尊が曾て跋耆へ行かれて、之を教へられたのである。此の七つの事柄、政治を講義すること、それから君臣相和すること、國風を守り禮儀を正しくすること、それから父母に孝、師長に敬、宗教を重じ、家庭の道德が純潔であること、宗教家を救ひ慈善を行ふこと、斯やうに政治及び社會の事に關して、大事な點が七つも教へられて居る。之を國家の七不衰の法と稱して釋尊は到る處に宣傳をされた、それ故に十六大國の國王一人も殘らず皆佛教に歸依した、だから國家を良くし且つ國家の理想を高くして國と國との間に戰爭の起らぬやうに、德教的の感化に依つて、平和を希望せられたのである。

尙ほ國家に關しては大藏經には守護國界經と云ふがある、これは色々の陀羅尼を說いた中に、一切の陀羅尼の中にはその母となるべきものがある、それは國界主即ち國王を守る陀羅尼である、それはオーンと云つて居りますが、支那の字では「唵」といふ字を書いて居る、これを印度人は今もやるので、日本でいへば帝國萬歲といふやうな譯である、オーン、一切の陀羅尼の中にこれが母であつて一番宜しい、菩薩行として色々な善いことがある、それを陀羅尼て言ひ現はす、その場合に國界主を守る陀羅尼を以て一番大切なりと說かれて居る。この經の中に金剛

手といふ菩薩が言はるるには、佛は平等三昧を以ての故に衆生を一子のやうに憐み、社會救濟を重んじたまふ教を立てられたと考へて居りましたが、今日の說教では國界主即ち國王を守護し、國を守ることが一番大事ぢやと仰しやつたのは、平等の慈悲の上から見て違ふやうに思ひますがと問ふた時に、佛は明かに汝が爲めに說かんと言つて、平等三昧と國王を守護する事とは、矛盾ではない、總ての者の幸福を思ふが故に國家を大切にせよと說くのである、人道主義と國家主義とは融和すべきである、例へば良き醫者があつて、小さい子供の病氣に罹つて居る者を治せんとするに、彼は藥を服まない、その時には母に藥を服まして子供の病を醫すやうなものである、個人々々の幸福は國家の保護の下でなければ保證することは出來ない、一切を愛護するから國王を守護せよと說くのである、一切の人々を可愛がるが故に國家の發達を圖れと說くのである。國王を守れば七つの事が發達をして行く、第一は太子が守護せられる、露西亞が革命をやつた時、國王を殺すと直ぐ太子を殺した、それから昔の源氏平家の戰なども必ず嗣子を尋ね廻してそれを殺す、菅原道眞が流された時に菅秀才を搜し廻つた、寺小屋源藏のあの話のやうなものである、だからして國王を守るといふ事に依つて第一太子が守られ、大臣が守られ、人民が守られ、經濟が守られ、軍備が維持せられ、その軍備に依つてはその隣邦が守護せらゝるのである、それ故に健全なる國家を擁護することは、恰も池に堤防がなければ水がなく、水がなければ魚が死するやうなもので、魚を愛するが爲めには、水を湛えなければならぬ、それには堤防が要る、さうしてその池には龍がすんで居つて、旱魃でも枯れないやうでなければならぬ、龍を以て國王に譬へ、堤防を以て國家に譬へる、さうして人民を魚に譬へて、どうしても堤防が大切であり龍が大切であるといふことを說かれた。この一節は誠に能く國家及國王人民の關係が分る、殊に日本の國體とは頗る能く合する譯なのであります。斯くて佛教が國家主義であることは頗る明瞭である、從つて仁王護國經の中には、護國品と稱するがあり、國を護ることを說かれ、我教は國王に託すると云つて、宗教と國家との融和を期されて居る、我が佛法は國王の支配下に託する、我弟子も國王の支配下に託すると說いた、これ等は基督教などと全然違ふのであります。

それから國家には戰爭が起つて來るし、刑罰の問題も起る、これは法華部の大薩遮經に能く說明されてある、戰爭は決して善いものではないが、併し已むを得ざるに於て避くることの出來ないものはその順序を頗る能く說いて居る、王論品の第三に、法行王、即ち轉輪聖王は三つの事を考へて後に戰爭しなければならぬ、それは反對の王が平和の心なく不法を爲す所のものだといふことの見込が付かなければならぬ、それから第二には成べく戰はないで濟むならば外交談判に依つて平和を實現したい、それでも行かなければ戰つても宜しい、第三には成べく殺戮を少なくする、或は毒瓦斯であるとか或は殘忍なる殺戮は避けるやうにしなければならぬ、慈悲心を以て原則としてやらなければならぬと說いてある。先帝の御製に

わが國に仇なす仇はくだくとも
慈しむべきことな忘れそ

と言はれたと同じ意味である、慈悲を以て戰の原則とする、さうしてその部下を率ゐて行く時分に於ても、軍人精神は道德觀念に置かなければならぬ、王に對して忠節を盡す、君命に重きを置き、王の精神たる慈悲を本として國家の名譽を傷けないやうにする、それからして軍隊の背後には國民が皆愛國心に立ち正義に立つて居る、その背後に國民の力を養うて置かなければならぬ、それからして國王は平生慈

愛を施してその君恩の辱けないことを考へさせなければならぬ、その代り愈々戰となつた時に於ては、大勇氣を起して、少しも怖氣を懷いてはならない、斯くの如くにして戰ふ場合には福あつて罪なしと說き、斯かる戰爭は決して罪惡でないと說かれて居る。

刑罰問題に就ても王論品の第二に、これも五つのことを考へて刑罰を行はなければならぬと說いてある、それは事實に相違しないやうに最も能く調査をして行く、さうしてその刑罰を行ふには成べく人の困らぬやうにしてやらなければならぬ、それからその事柄に就て矢張り何處が罪になるかを善く考へねばならぬ、取調に當りては脅迫してはいけない、優しい言葉を以て彼等の精神を述べしむる、一切は慈悲の精神に立つて行ひ、刑罰を怒りの心より行ふことは斷じて許されない、死刑を廢止しなければならぬことも說いてある。それからその罰の根本は道德に違反する事から出て來るのであつて、法律の根柢は道德なることを說いてある。父母の恩に反するところの不孝の罪は一番重いものにしなければならぬ。それから國王の恩を忘れる事、殊に役人が不都合をする場合に於ては、延いて王の德に及ぶ、左樣に臣に不正行爲があれば王の德を傷けること大なる故、左樣な者は假借なく處分をしなければならぬ、官吏政を紊る時に一切の禍亂その中より生ずる、政治上から來る罪惡を第一に防止することが肝要である。それから第三は主從の關係、資本勞働の關係である、これは主人が威張つてはいかぬ、一家の成功は大勢の努力に依つて來るので、これは皆共報である、協力の結果であるからして、決して一人が利益を私すべきでない、各々その處を得るやうにして行かなければならぬ、資本家が橫暴であるとか、又勞働者が跳梁跋扈するとかいふことは罪惡であるから、法律を以て嚴禁しなければならぬ、左樣な者は牢獄に投じてしまはなければならぬと云うてある、それから天地の恩を知らぬ、宗教の信仰に反對するやうな者も處分しなければいけない、何故かといふと宗教心が一切の善根を發達せしめる因である、この宗教心を破壞する罪惡は一切の善根を燒き盡すものである、宗教だけを壞すと思うて居るけれども、それから總ての罪惡が皆起つて來るから、宗教に關することは餘程大切な問題である、根本の重罪であつて決定して一切の善根を燒滅せんと說き、宗教を破壞する時、總ての善事は皆燒き盡されてしまふものである、この四恩を刑罰の原則として考へて居る。

權利利益の原則でなくして、道德に原則を置いたのが釋迦の刑罰である。それからこれは大薩遮が皆話したのですが、この大薩遮といふのはどんな人かといふと、これは尼乾子といつて波羅門の姿をして居る、釋尊と問答をして釋尊に敬服して、熱烈な佛教徒であるけれども元の波羅門の姿その儘、佛教の宣傳に勵みました。だからこの王樣は佛教徒とも考へずして話をして居つた、所がすべて佛教の意味で說明をするものだから、この王樣が大薩遮は釋迦如來の所へ行つても、尊敬の考を持つて居るのか、話の內容はすべて佛教ぢやが、このくらゐ偉くなると佛を敬はないかも知れないと心の中で考へた、それが素振にちよいと見えた、所が大薩遮が非常に激昂したのである、そこが愉快なので、釋迦如來ほど偉い人に何處に缺點があつて、それを輕蔑する心が生ずるか、といふことで王樣に迫つた、非常に面白い一段がある、釋迦は一切智を體得して居り、慈悲の心平等である、釋迦は大慈悲心があつて普く一切衆生を救ふ聖者であるから、佛世尊と名づけられて居る、實に一點の瑕瑾なき聖者である、何處に隙があつて俺が釋尊に對して侮蔑の念を懷くことが出來やうぞ、彼が若し出家しなかつたならば、正に轉輪聖王となつて四天下に王たるべく、正に法行を行じて理想的模範的の大王なるべし、それを私が釋尊を侮蔑する

かといふやうなことを、あなたがお考へになるとは怪しからぬ事ぢや、何處に釋尊に申分があるかと迫つた、到頭王様は閉口して、傍が惡かつたと謝られたのである。それから自分の家來を伴れてお釋迦様の所へ說教を聽きに行くことになつて居る。この對話に依つて釋尊はどういふ問題に就ても、達觀して居たものだといふことが知らるゝ。これは大乘佛教の大薩遮經といふ法華部になつて居るので、法華經に現れてあるも同樣であります。阿含の方にこれに關聯して愉快なことを發見しましたから御紹介して置きます、大薩遮は斯くの如く智慧もあり辯もある偉い人であるが、それが釋尊と初めて問答した時に感服したので、それは雜阿含經の中に下の話が出て居る、釋迦が胸を開いてさうして言はるゝには、今まで色々お前と議論をした（全力を注いで大薩遮は釋迦と戰つた）けれども、お前が擧げた問題位では、我に對しては胸間の毛一筋も動かすことは出來ないと言はれた、その時大薩遮は色を失ひ佛に申して曰さく、あなたは恰も武士が鋒刃を亂下するも、身を轉じて少しも刃が中らない達人と同じことである、私は鋒刃を投げ付けたけれども、擦り傷だもあなたに與へることは出來なかつた、さうしてアベコベにあなたから向けられた議論の鋭さといふものは迚も尋常なことでない、毒蛇が入つて居るところの籠を牢の中へ投り入られ、何十とも知れぬ毒蛇が牢屋の中に來たと同じて、それに噛まれぬやうに逃げ歩くことは出來ても、あなたの論難攻擊からは逃れることは出來ない、廣き野原が一面に火事になつて居る、どちらに逃げやうとしても逃げられさうもない、面もそれを何等かの方法で脫れ出ることが出來たとしても、あなたの攻擊の論鋒を逃げることは出來ない、兇惡なる象が飛掛つて來るのをば脫れることが出來ても、あなたの論鋒を脫れることは出來ない、澤山の狂へる獅子が飛掛つて來てもそれに噛まれぬやうにすることが出來ても、あなたの議論の手の中からは脫れることは出來ないと言つて居るが、之に由つて如何に釋尊の議論が鋭かつたかが分る。日本人は餘り釋尊觀が淺薄である、大薩遮經を研究すれば實に立派なものである、それが釋尊に絕對の敬意を拂つて居る、釋尊が尋常な方でなかつたことは極めて明かではないか。

尙ほ釋尊が戰爭に關して說かれて居ることを一言加へて置きたい、戰爭は慈悲の精神からであるけれども、初め言ふた如くに、國家は正義を守る爲めに十分威力を備へなければならぬ、そこで大涅槃經の方には斯ういふことを說いてある、正義を脅かさるゝ時には無論國王は正義を護る爲めに戰さを起すべきて、刀兵の劫即ち戰鬪の盛んな時代に於ては、大力勢を有し、その殘害を斷じて遺餘なからしめる、即ち武力に依るところの害毒を全滅してしまつて、再び起つ能はざらしむるやうに膺懲を加へて、人類の幸福を保護しなければならない、それが爲めには最も優秀なる力勢を持たなければならぬ。唯、正義を口にし、宗教と道德とだけではいかぬ、必ず外から來る迫害に打勝つだけの力を持たなければならぬ、これが轉輪聖王の四兵であり、日本の國がこの點に於て誠に能く整うて居ると思ふ、儒教に於てはこれが缺けて居る、缺けて居つたから山鹿流の武教が起つたので、又支那に於ても聖賢の教が力を失ふたのである。佛教の轉輪聖王の精神から行くと、正義に基いて暴力を制裁するだけの力を有すべきである、併し何處までも道德的であるからして、國王の本分といふやうなことは中々能く說いてあるのであります、國家は斯ういふ事をしてはならぬ、あゝいふ事をしてはならぬといふことで、雜阿含經に國王の十非法というて、十種の事柄を戒めてあります。それは國王は欲心が强くあつてはいかぬ、又人の諫を容れないやうな事ではいかぬ、不德なる行はいかぬ、

妄りに人を牢獄に投ずるやうな事をしてはいかぬ、女色に溺れてはいかぬ、酒を妄りに飲み過ぎ怠つてはいかぬ、無暗に新聞などに心酔してはいかぬ、長患ひをして居つては到底その國は盛んにならぬ、又忠義の家來を信用せず、段々自分を助ける人が少なくなるやうな事てはいかぬ、といふやうな工合に國王の事に就ても中々嚴嚴な戒めがある。てありますから釋尊は國家を愛護して理想的に導いて行く、所謂日蓮の立正安國の精神が即ち釋尊の國家觀てあると云つてよいのであります。

尚ほ餘論として申したい點がありますけれども、時間が足らないから略して置きます。

釋尊は伽毘羅城に生れたまひしが、その國は理想的の國家てあつたので、それには六十種の美點が算へてある、先きに言ふた轉輪聖王の出られる品位道德の發達して居る國家てある、毘耶離城といふのは自我的の處てあつて、デモクラシーの國家てある、それを釋尊は否定して居る、デモクラシーといふことは無論善い點もあるが、それを釋尊は慨嘆した、毘耶離城は國人の心が强過ぎて自分が皆王者だといふ、國人皆我はこれ王なりと稱す、傲岸放逸、人と協力することが出來ない、色々の種族が集つて居つて、尊卑大小の禮節なく秩序なく、俺は何ても知つて居ると、慢心のみ發達し、王ありと雖も尊敬しない、自分の考へたことが一番善いと思つて、他に從つて教を受けない、そんな國は駄目ぢや、決して理想の文明は發達しない、故に其處へは生れぬといふてある。どうしても社會には專門的なものが起つて來るので、宗教は宗教の事に專任する人があり、政治は政治、軍人は軍人、工業は工業で專任者があつて、各々人格には違ひはないけれども、皆職業が違ふ。それから社會の墮落を非常に御心配になつて居る、墮負門と稱して、新ういふ事に依つて世の中がいけなくなると示されて居る、博奕、飲酒、女色、無駄使、それから年老つた女が若い夫を持つ、嫉妬を燒く、それから年老つた男が若い女を持つ、財產の爲めに兄弟が喧嘩をする、色々さういふやうな社會の事を擧げて、そんな事に依つて社會が段々惡くなる。それから六損財業といふて、六つの事に依つて經濟がいけなくなると云ひ、詳しく說いてあります、酒、博奕、放蕩、それから遊藝、惡い友達、怠ける事、これ等に皆六つの科がある、酒にも六つの科がある、博奕にも六つの科がある、それから放蕩にも六つの科がある、遊藝にも六つの科がある、惡い友達にも六つの科がある、怠けるにも六つの科があるといふので、六六三十六の缺點を示して、社會の改善を佛教に教へて居る。それ故に菩薩行として三十二種守護經の中に說いてありますが、三十二の菩薩行を見ると、今の政治の仕事、社會の仕事、その他色々の文明の改善に努力することが皆菩薩行てある。故に日本ては聖德太子の爲された事柄、あれは全部菩薩行として考へれば宜いので、佛教を狹隘にし、又低級なものにしたのは、これは鎌倉以後の失態てある。日蓮聖人は傳教や聖德の衣鉢を繼いだのてあるからして、佛教を矢張り立正安國の精神に見て、王法佛法の冥合を唱へられたのてある。

佛教と政道の關係に就ては、以上の外色々重大な問題がありませうが、初め申した通り甚だ未熟な研究て、釋尊に對して申譯ないことゝ思ひます、甚だ疎雜なことを申上げて相濟まぬ事てありました。これて失禮致します。

四日市安樂寺の寺號移轉認可

昨年五月本堂落成入佛供養を擧行したる、三重縣四日市の安樂寺は、寺號移轉の認可申請中なりし處、本年三月十三日付認可あり、第一世として大僧正本多日生猊下を住職に迎へて、四月廿一日盛大なる祝賀法要並大講演會を擧行したり、詳報は次號に。

記事

各地の思想戰

京都三月活動史

三月一日於本山國聽會修行後潛龍室に於て講演「維賢蔵經の一節」土持良逸師△同日午前七時より本山講堂に於て健兒會例會、林清一、山田篤三郎、有田安道各氏の童話あり。△二日本山方丈に於て護正會例會、「大涅槃經讀講」萩原本山部長「日蓮上人傳」（統一節）宇都宮弘道君「同」同主計之介君△六日本山講堂に於て健兒會例會、林玉光、安井眞敬、土持良逸各氏の童話△八日威鎮院に於て護正婦人會例會「人生究竟の目的」有田安道師△九日正行院に於て正行婦人會例會、「日蓮主義奮闘」有田安道師△十日大慈院に於て法王婦人會例會、「信仰の威力」土持良逸師△十一日本山講堂に於て健兒會例會、「狐と黄金の玉」高岡利七君、「少年戰手」山田篤三郎君、「日蓮上人遺跡の場」有田會長△十三日本山に於て宗祖會修行後講演「信仰の生活」金光孝碩師△十六日健兒會々員保護者會開催、詳細案。

一、兒童が健兒會へ來會に就ての父兄の感想

一、智、德、體三育に就ての父兄の意見

終りて桂文之助君の教育落語二席盛大裡に十時散會△十八日於本山彼岸會法要後講堂に於て大講演會を開く「如渡得船」有田安道師、「女人成佛論」萩原本山部長△十九日本正寺に於て彼岸會法要修行後講演、「生活の安定」金光孝碩師△二十日豬熊米同善二郎氏宅に於て家庭法話、「情の力」金光孝碩師△廿一日本山に於て彼岸中日法要後午後二時より本堂にて說教、「世界代表の日蓮主義」江見乾丈師△同日健兒會例會、「宮本武蔵武勇傳」林玉光先生「三人兄弟」（旭子供會）江坂義延先生「無學の士」二木滿次先生△二十三日淑光寺に於て彼岸法要修行後彼岸說教、萩原本山部長△廿四日本山に於て彼岸結日法要後說教「佛教より觀たる社會」土持良逸師△廿五日健兒會例會「心眼を開いた實話」高岡義雄主事「忍耐」土持副會長△廿六日本山講堂に於て管長親下の御講演、

祖師要文（道義編）　本多親下

來聽者約二百名、始めより終りに至る迄只の一名も退場する者無く何れも熱心に傾聽す、殊に妙齡の婦人の多く來聽せしは人目を引きたり。

神戸の奮闘

三月廿五日午後〇時半より、三菱內燃機會社職工一同一千名、「東西相倚る」△同午後四時半より、神戸製鋼所職工半數、一千名、「戒申誡書に就て」△同夜七時より、勤業館にて公開、「祖師要文」△廿七日午後〇時半より、三菱造船所職工半數、四千名、「歷史の感化」△同午後四時より、神戸製鋼所職工半數、千五百名、「人格本位」△廿八日午後〇時半より、三菱電機會社職工一同、千三百名、「三大自覺」△同午後三時半より、三菱造船所職工半數四千五百名、「戒申誡書に就て」△同五時より、三菱社員一同、百八十名、「修養と思索」。以上本多親下御講演。

名古屋教壇

二月廿二日於常德寺「日蓮主義綱要」本多親下、△廿三日於同寺「日蓮主義綱要」本多親下、兩夜共聽衆一千名以上の大盛會なりき。△三月八日於常德寺妙教婦人會「牛乳の話」廣瀨農學士、「因果律に就て」國友文學士、△九日於橋崎宅病中所感」川島常胆、「死の問題」廣瀨農學士、△十日於刈谷町長遠寺講演會、廣瀨農學士講演、△十三日於相澤宅「本佛と妙法と信仰」國友文學士△十七日於常德寺「日蓮主義綱要」本多親下、△十八日於同寺「日蓮主義綱要」本多親下、兩夜共滿員の大盛會なりき、

大阪堂閣寺教報

三月十二日堂閣寺にて三十五名、「異體同心」石井貫一「久遠本佛と我等」土田布教師△十六日夜堂閣寺にて二十五名、「信仰の力」高木布教師△二十一日堂閣寺にて、七十五名「日蓮主義の態度」三谷會善、以上各師熱辯を振ひ聽衆に感動を與へたり。

朝鮮教報

釜山天晴地明會設立以來滿六週年、並顯本法華布教所新設紀念の爲め、管內布教師文學士中川日史師、曾正能仁事一師の兩師を招聘し、釜山日報主催の下に四月一日午後、釜山日報樓上に於て、社員二百名の爲に日蓮主義文化大講演並に思想問題講習會を開催せり。「開會の辭」芥川社長、「理解ある修養」能仁曾正、△四月一日午後八時法要後於顯本布教所講演會、「開會の辭」横山惠正師「本佛實在の秘旨」中川文學士、「法華信仰の訓練」能仁曾正、聽衆信徒百四十名、△天晴地明會滿六週年、顯本布教所新設紀念大講演を二日午後正一時より國際館に於て開く、「開會の辭」横山司會者、「御遺文拜讀」武壽分氏、「本會宣言」矢頭伊吉氏、「觀詞朗讀」吉川菊雄氏、「觀電披露」稻葉彦藏氏、「現代世相を顧みて」中川文學士「文化生活と日蓮主義」、能仁曾正、「萬歲三唱」司會者、「閉會の辭」別府禮吉氏、聽衆八百餘名。△三日於第五小學校講堂講演、「開會の辭」中村校長、「美の修養」能仁曾正、聽衆女子同窓生四百、△四日於高等女學校「開會の辭」安藤校長「心のしまりは身のしまり」能仁曾正、聽衆女學生四百△於牧島小學校講堂「文化生活」能仁曾正、聽衆一般人三百六十△於第一小學校「開會の辭」山上學務主任、「思想問題の標準」中川文學士、「人作者一點要素心」能仁曾正、聽衆釜山教育會員三百六十、△五日於釜山守備隊野外「紹介」蒙田大尉、「體同用異」能仁曾正、聽衆下士兵卒二百名△於釜山府廳樓上「開會の辭」本田釜山府員、「人作者一點要素心」能仁曾正、聽衆府廳吏員百八十名△五日於第七小學校「開會之辭」本田釜山府員、「婦人の文化運動」蜂谷經一氏、「我國將來の婦人」能仁曾正、聽衆一般婦人三百餘名△五日於商業學校「開會の辭」守分會監、「正しき人强き人」中川文學士、聽衆生徒二百名。講習會は四月二日より五日迄釜山第一金融組合階上にて開催、聽講料一人金一圓を徴集し每夜二百三四十名の聽衆を見るに至り近來稀なる盛會なりき。「開會の辭」横山惠正師、「現代思想に對する法華經的考察」中川文學士、「日蓮主義の五大要綱」能仁曾正。

岡山縣和氣教報

△三月四日赤磐吉原岡野作太郎宅（信條本義）原田師△十五日本成寺婦人會（受持信念）高木本願△十六日同信會本成寺（終時防止）原田師△十八日彼岸初日本成寺（同胸と雙）、原田師△廿一日彼岸中日（祖書拜讀）原田（家庭の料理）、安藤久松△廿四日彼岸結日（妙法の曼陀羅）、原田師△廿八日天瀨修養會（所感）、髮野健嚴（誠心一貫）、原田師

金澤教信　三月十一日於木林氏宅、「廣宣流布の願業」本郷常次郎、「佛陀の意義」窪田純榮△同廿一日於本覺寺彼岸會「受持」窪田純榮、「佛教の三世因果論」本郷常次郎△同廿二日於本長寺、「知恩報恩」窪田純榮、「四法成就」石橋會章△同廿六日天晴會講演、「法華經序品講義」窪田純榮。「人生の無常」小島由之助。

千葉縣　△三月四日印幡郡八街町小間子小野氏宅にて講演、「社會と佛教」高貫見龍△五日山武郡丘山村丹尾東成寺婦人會、「家庭と佛教」高貫見龍。△十四日同所に於て宗祖誕生會、及十六日會一周年紀念法要執行、高貫見龍、山田誠心、都築信寛、出席、終つて講演、「同會の辭」高貫見龍、「所感」山田誠心、「文化運動としての懺悔」文學士武田關龍、△十六日同郡滝井平貫平吉方法話、「信心の三義」高貫見龍、△十八日同郡同村東成寺にて彼岸會說教、「受持成佛」高貫見龍。

前ノ内常覺寺　三月六日夜女人講「人間として」中島元道師△十日夜題目講「日蓮聖人傳」中島元道師△十三日婦人講、「六方禮經に就て」中島元道師△十八日夜青年會例會「佛教概論」中島元道師△廿一日蓮成寺に於て「信の一字」中島元道師△同廿八日、山武郡片貝村小關妙覺寺に於て、信徒大塚清吉氏の寄附したる日蓮上人木像の入佛式を兼て顯本教會の發會式を開く、參詣人七十餘、「同會の辭」大橋山主、「慈悲の聖訓」中島元道師、「至誠の力」土屋布教師大網町本國寺に於て、四月九日、定例の日蓮主義朝日講大會開催、前十時國碕會嚴修、後一時より、講演、土屋賢生師、「土龍御書說教」中村日錦師、「宮谷懷古」、成東中學校教員石井信一氏「南無の生活」小竹俊雄師、「上眼斷眠」の題下に何れも現代思想問題より說き起し、廣長舌を振はれ、一千數百名の聽衆皆感奮の色を呈せり。△夜間は日蓮聖人の幻燈を傳ふし、海老澤乾樹師、都築信寛師、野口海印師等の親切なる熱辯を傾聽、大聖人渴仰の信念を一層深厚ならしむ殊に夜間は約一千四五百名、流石廣大なる本堂も立錐の餘地なく堂外に溢るゝ稀有の狀況なりき。因に朝日講員は九百五十名あり。

各地婦人會通信

朝鮮釜山の地明婦人會　釜山大廳町顯本布教所に事務所を置く、毎月の例會講演の外慈善的公益事業を行ひ、會員の心得として左の五項を規定せり。

一、朝夕必ず御本尊を禮拜せらるべし。
一、常に慈愛の心を以て人に對せらるべし。
一、服裝は質素を旨とし奢侈に流れぬ樣せらるべし。
一、時間と約束を能く守らるべし。
一、集會の際はお互に誘ひ合せて、成るべく多數來會する樣努めらるべし。

◎各地婦人會の通信を歡迎す、ドシ〳〵投稿されたし

名古屋自慶會月報

財團法人設置申請中なりし所今回認可せられ、依つて名古屋自慶會と改稱したり。

○二月廿日、豐田本社八百名「欲を捨よ」國友文學士、「慈の德」本多稅下、○廿一日、菊井工場二百名「人の心掛け」國友文學士、「一心太助の話」本多稅下、○廿二日、豐田押切工場三百五十名「人の性」國友文學士、「一心太助の話」本多稅下、○廿二日、帝國機絲千五百名「正しき理解と强き決心」本多稅下、○廿二日於各古屋巡行三百五十名「思索の標準」本多稅下、○廿三日、三菱內燃機一千名「正しき理解と强き決心」本多稅下、○廿四日、菊井紡織七百名「欲を捨よ」國友文學士、「罪と德」本多稅下、○廿四日、豐田機織一千名「正しき理解と强き決心」本多稅下○三月十六日、豐田機織一千名「修養は感ずるにあり」本多稅下、○十七日、豐田本社八百名「國體の精華」本多稅下、○十八日、三菱內燃機一千名「憐らず怖れず」本多稅下、○同日市教育會二百名「政道と佛教」本多稅下、十九日、菊井紡織七百名「釋迦一代記」本多稅下、○同日、淺野木工場百五十名「佛教と實生活」本多稅下。

第一布教團の活動

東京寺院聯合の第一布教團は、平和博覽會開會を好機として、大々的宣傳する事になり、統一闘を中心としたる布教、及び青年有志僧員の屋外傳道、更に本多大僧正の講演せられたる日蓮主義信仰の要旨と題する極めて平易簡明にして有益なるものを、普く配布し、尙宣傳ビラ代用として日蓮上人聖訓と云ふ豆本を撒布する事になれり。

巡回教化

千住三河島三輪方面の下層社會に活動する事になり、此の方面埼任として秋山布教師が當る事になれり。三月八日午後七時南千住三輪に於て開催、「信行要義」秋山乾英師、「不動の信念」高木日晴師、「活動の源泉」笹川僧正、紙川蝶花の講談あり、豫期以上の功果を收め、尙ふ西ヶ月間の會場も決定し、信徒の面々非常の意氣込なり。△十三日午後七時、於大井町鈴ヶ森天慕內、當日降雨なりしも參聽者約百名、「巡回教化の意義」大森日榮師、「教化示道」笹川僧正、△十四日午後七時、於同所開催、「釋尊の行化」溝口會旭師、「公德心の振興」笹川僧正、兩日共京濱同盟教道遭難者の弔「法要あり、十四日は參聽者約三百名、何れも大天慕うご〳〵寺の活動と、宗教的社會教化の獻身的なるに感歎せり。△二十二日午後一時より、隅田川畔に於て教道從業員殉職者諸靈魂の弔慰法要擧行せられ、本多大僧正親下大導師の下に厳粛なる法要を修し、了はりて國民文化の基礎となるべき日本文明の特色を熱說せられ、多大の教益を與へられたり、當日出席の僧員は如左、參聽者約七百名、笹川部長、鈴木權大僧正、大須賀玄澄師、石黃英敬師、安田台峻師、金坂義昌師、秋山乾英師、高木日晴師、山形眞瑞師、大川孝準師、木內翻順、小泉顯應の十二名

名古屋靈山寺の大法要

本堂修繕中なりし靈山寺は、爲程落成せしを記念に廿二日は野口權大僧正大導師の下に開堂供養、廿三日は管長猊下御親修の下に、開基日經上人三百遠忌大法要を厳修せり。殊に廿三日は百五十余名の稚兒の練行列行はれ、本堂内も、廣き境内も、參詣人を以て溢るゝの大盛會なりき。尚爾日共法要後には群投あり、說教講演は晝夜行はれて參詣の善男善女、不惜身命の行者日經上人の御德をば今更の如くに感喜渇仰せり。因に講師及講題は次の如し。廿二日午後法要後說教、清水山主の開會の挨拶の後荘川監督布教師出演。夜講演會「開會之辭」松本堅晴師「人生と日蓮主義」有田宏道師「世界最後の宗教」森原本山部長「日經上人日秀上人頌德」野口權大僧正。△廿三日午後法要後說教、野口權大僧正出演。夜講演會「開會之辭」兒玉常宣師「犯者に何をか學ばん」金光布教師「精神的活動」荘川監督布教師「發心起行得益」本多管長猊下。

統一團青谷支部發會式

鳥取縣因伯の國境青谷町に、日蓮上人の法義を慕ふて集れる信徒數十あり、さゝやかなる廟堂を結び、鳥取市の某寺院に所屬して今日に至りしが、時代と共にめざめたる彼等は、日蓮の眞人格に接し純正なる日蓮主義に徹底せんとして、諸余なく、信仰なく、理想なき、唯舊き形のみの化導を捨て、相率ひて本多大僧正の旗下に走せ參じ、統一團青谷支部を設立し、三月十一日を以て其の發會式を擧げ、併せて同町小學校に於て晝夜兩度大講演會を開く、晝中島君の前講の後「人の本性に徹めよ」國友社會部長。夜富田師の前講の後「精神生活に就て」國友社會部長。晝夜共非常の盛會にして、將來願本の道場を得べき機運調熟せり。

鶴巻舞鶴の新寺信行寺に於て、十二日夜統一團新舞鶴支部の例會を開く、「佛性の開發に就て」國友社會部長の講演あり、來會者堂に溢る。

寺院開放

顯本法華宗社會部

實費宿泊所

各地に來往する本宗檀信徒及び所縁者の爲に、實費宿泊所として左記本宗寺院を開放す。但し地方寺院住職の紹介を要す。

東京市淺草區北清島町（停留場附近）	統一團	同	吉野町（停留場表通）	圓常寺
同　（同）	常福寺	同	新谷町（十二階裏）	壽仙院
同　南松山町（菊屋橋停留場）	法城寺	同	永住町（北清島町停留場）	妙經寺
同　下谷區池ノ端七軒町	妙國寺	同	谷中初音町	本授寺
同　本郷區駒込蓬萊町（有町停留場）	願本寺	同	小石川區原町（榊ヶ谷町停留場）	本念寺
同　赤坂區一本木町（赤坂見附停留場）	常玄寺	同	牛込區原町（柳町停留場）	常樂寺
同　早稲田南寺町（早稲田終點）	正法寺	同	西谷區南寺町（雜町停留場）	法恩寺
東京市外巣鴨町染井	蓮華寺	同	市外高田町雑司ヶ谷	本敎寺
右同所	寛受院	同	市外品川町南品川（青物横丁停留場）	妙國寺
右同所	眞了院	同	市外品川町（南馬場停留場側）	妙蓮寺

寺院開放

顯本法華宗社會部

右同所　本光院寺　　右同所　本榮寺
右同所　清光院　　同　市外入新井町（大森停車場約五丁池上道）善援寺
千葉市本町　本圓寺　　静岡縣田方郡三島町　本妙寺
同　盤田郡見付町　玄妙寺　　愛知縣豐橋市清水町　妙圓寺
同　名古屋市中區新榮町　常德寺　　同　同　同古渡町　靈山寺
京都市寺町二條　妙滿寺　　大阪市東區西高津中寺町　蓮成寺
同　南區生玉前町　堂圓寺　　福井市相生町　妙經寺
廣島市新川場町　本照寺　　久留米市寺町　本泰寺

監督寄宿舍設置

一、各地に在學する學生の爲に左記本宗寺院内に監督寄宿舍「龍淵塾」を設置す。

在學生は朝夕の勤經を怠らず及び日蓮主義宣傳に應分の任務に從ふ者とす。

東京府荏原郡品川町　妙蓮寺　　名古屋市中區新榮町四丁目　常德寺
同　東區田代町　法道寺　　京都市寺町二條　妙滿寺

廣告

本常寺建立淨財寄進申込者芳名（第二回分）

愛知縣北設樂郡上津具村

一金壹百圓也（即納）　總本山　妙滿寺　一金拾圓也　窪田純榮師
一金壹百圓也　大僧正　本多日生猊下　一金拾圓也　成島隆康師
一金拾圓也（即納）　山岡日紹師　一金拾圓也（即納）　島田日闡師
一金拾圓也（即納）　笹川日堂師　一金貳拾圓也　村上篤三郎氏
一金拾圓也　坪永日暨師　一金拾圓也　原田日勇師
一金拾圓也（即納）　萩原日道師　一金拾圓也（即納）　入江善平氏
一金拾圓也　金光孝碩師　一金貳拾圓也（即納）　和井田寛冉氏
一金拾圓也　有田宏道師　一金拾圓也　上田智量師
一金拾圓也　土持良達師　一金拾圓也（即納）　野坂健二氏
一金拾圓也　大森日榮師　一金拾圓也　富田日進師
一金拾圓也（即納）　石井寛俊師　一金參拾圓也（即納）　西村吉右衛門氏
一金拾圓也（即納）　堂亮雄師　一金拾圓也　秋葉日虔師

一金五圓也　鈴木乾泰師　一金壹圓也(即納)
一金五圓也　花澤暐泰師　一金五圓也(即納)
一金五圓也　森　俊榮師　一金參圓也(即納)
一金五圓也　藤平法順師　一金參圓也(即納)
一金拾圓也　熊井本光師　一金貳圓也(即納)
一金拾圓也　武田顯龍師　一金壹圓也(即納)
一金拾圓也(即納)　川崎英照師　一金壹圓也(即納)
一金五圓也(即納)　山形眞瑞師　一金壹圓也(即納)
一金五圓也(即納)　三谷會善師　一金壹圓也(即納)
一金參圓也　中村映叔師　一金壹圓也(即納)
一金壹圓也(即納)　三田村セキ氏　一金壹圓也(即納)
一金貳圓也(即納)　川崎本照師　一金壹圓也(即納)
一金參圓也(即納)　須山しを氏　一金壹圓也(即納)
一金壹圓也(即納)　中塚末子氏　一金壹圓也(即納)
一金壹圓也(即納)　丹原小蝶氏　一金壹圓也(即納)
一金貳圓也(即納)　坪井庄吉氏　一金壹圓也(即納)
一金壹圓也(即納)　恒次留太郎氏　一金壹圓也(即納)

因幡馬吉氏
吉川平兵衛氏
森口勝次郎氏
橋本藤次郎氏
西山定次郎氏
三宅益三氏
金光松次郎氏
小松原熊太郎氏
佐藤時次郎氏
松田岩吉氏
安田喜左二氏
高木トク氏
妹尾マツ氏
土方光氏
秋山アキ氏
鳥越小松氏
佐藤森太郎氏

一金壹圓也(即納)
一金壹圓也(即納)
一金壹圓也(即納)
一金五圓也(即納)
一金壹圓也(即納)
一金壹圓也(即納)
一金參圓也(即納)
一金壹圓也(即納)
一金壹圓也(即納)
一金五圓也(即納)
一金五圓也(即納)
一金貳圓也
一金貳圓也(即納)
一金壹圓也(即納)
一金五圓也(即納)
一金壹圓也(即納)
一金五圓也(即納)
一金拾圓也(即納)
一金五圓也(即納)
一金五圓也(即納)

磯井氏　一金拾圓也(即納)
今井森次郎氏　一金參圓也(即納)
丸川重男氏　一金五圓也(即納)
橋武次郎氏　一金五圓也(即納)
西川寅吉氏　一金五圓也(即納)
久城直太氏　一金貳圓也(即納)
金鐃吉氏　一金貳圓也
山本シヅ氏　一金壹圓也
小林倉三氏　一金五圓也
井上氏　一金拾五圓也
岡田文次氏　一金拾五圓也
高橋ゲン氏　一金四拾圓也
西村たか氏　一金貳拾圓也
西村きぬ氏　一金六拾圓也
國光婦人會　一金貳拾圓也
內本八尾氏　一金貳拾圓也
清瀨トク氏　一金拾圓也

辻俊泰氏
瀨戸兵藏氏
丸山惣三郎氏
大橋松次郎氏
長尾スミ千代氏
世良忠八氏
吉岡文太氏
三木勢治氏
妙隆寺
妙高寺
本妙寺
妙松寺
玄妙寺
妙立寺
妙泰寺
妙安寺
正覺坊

一金壹圓也　妙經寺
一金壹圓也　妙源寺
一金五圓也　正住坊
一金五圓也　養仙坊
一金拾圓也　妙泉寺
一金六拾圓也　妙圓寺
一金拾五圓也　堂行寺
一金四拾圓也　法華寺
一金拾圓也　長遠寺
一金參拾圓也　越境寺
一金參拾圓也　靈山寺
一金七拾五圓也　常德寺
一金拾圓也　妙行寺
一金五圓也　法道寺
一金貳拾圓也　安樂寺
一金壹圓也　常隆寺

社告

時は來ました、日蓮主義勃興の時は來ました、そして日蓮主義によりて思想問題、社會問題、人生問題、婦人問題等は解決されねばならなくなりました。此時社會國家の諸般の施設は、日蓮主義に覺醒めた婦人の努力奮闘に待つべきものが多々ある事と信じます、こゝに本誌は日蓮主義婦人團體の全國的統一と、その振興改善を企てたいと存じます、奮つて御賛成を希望します、そして左記の通信を御願ひします。

一、御關係の日蓮主義婦人團體の、會則、事業、成立後の略史、會員數、其他參考とすべき條項

一、日蓮主義婦人團體の統一及改善振興に關する意見（御通信中讀者諸君に參考となるべきものは本誌上に發表致します）

以上本年五月廿日迄に冬古屋市中區新榮町統一編輯局宛御通信を乞ふ。

大僧正本多日生師講述

法華經要文講義

てあるといふ風に、内外を別つ意味だといふことにもなつて居る。それはその序に依つてその内容が變つて來る、丁度芝居の序幕みたやうなもので、そこに出て來る事に依つてそれから次に起る劇の内容が判つて來るのである、心中物のやうな芝居であれば、やはりその序幕の時に噂さみたやうな事をいふに就いても、何だか人生の極く世俗的なる事を寄り合うて話すやうになつて居る。それから又忠臣烈士の劇を演るのであれば、やはりその序幕に出て來た者が、人は左樣な卑近なことにのみ一生を終るべきものでない、高潔なる道徳の下に立たなければならぬといふやうな話し合ひみたやうなことをして引込んでしまふ、さうすると次の幕に忠臣烈士の劇が出て來るといふやうなもので、その序の光景は微かであるけれども、それに依つてその内容が判るのである。だからその序の光景は内外を別つ、門が立派であればその中の家も立派であるといふやうに、序の光景に依つて略其の經の内容を察知することが出來るといふのである。廣くは無量義經が法華經の序なるが故に、前にいふ方便と眞實の分界を立てゝかゝつたといふ、その序幕は直ぐ法華經が眞實を說くお經であるといふ、その點が最も重き事に相成つて居る譯である。今この法華經の中に入つての序品は、これ亦佛が世に出てた最高の目的を果さんとする所謂出世の本懐と言つて、世に出てた眞實を語らんとするものであるといふことを、序の光景に於て現はして居るのである。それ故に序の狀態は、そこに法華經の法座に集つた人達を最初に詳しく書いてあるのであるが、これが非常な整うた聽衆であつて、決して一人の婦人の爲に說いたとか、或る事情に依つて說

いたといふ〳〵な小さな法座ではない、總ての者を集めて其處に列座して居ることが擧げられて居る、所謂堂々たる儀式の前に佛の眞實を發表する、丁度國家で言へば即位の御大禮といふやうな時には皆それ〴〵の代表者が集つて、さうして紫宸殿に於てその式を行はれるやうな譯で、丁度さういふ堂々たる儀式が列座衆の狀態に於て見られる譯である。さうしてそこに現はれた光景が非常に美しいので、佛は無量義處三昧に入つて眉間より白毫の光を放つて、非常な美しい光景がそこに現はれて居る、天よりは華が降り、虛空には音樂が聞えるといふやうな麗かなる光景が演出されて居るのである。これも皆法華經の理想をそこに現したのであつて、前にいふ通り序の光景は內容を現すといふのである。芝居などでも必ず序幕に現れる機微から察知するといふて、簡單に言ひ居る事、或はちよつと現れるその光景が、總べて後の劇の中心の事實と相反映して來るやうになつて居る、それ故にちよつとそこに鼓が鳴つたとか華が降つたといふことでも、それを輕く視ることは出來ない、その序の上に現れる機微なることが、後に現れる法華經の教義の大精神をそこに象徵して、さういふ形で現して來るものである、即ち佛は光を放ち天よりは華が降り虛空には音樂が聞えるといふやうな麗かな光景を演出して、そこに文殊菩薩と彌勒菩薩の問答が始まるのである、丁度芝居の始めに二三の人間が出て來て語り合ふことがある、それと同じやうになつて居る。それは彌勒が問ひになつて文殊が答へた有樣でありまして、之を賓主問答と稱して居る、序品ではこの賓主問答といふ事を心得るのが大事な點になつて居るので、これはどつちが賓でありどつちが主であるかは中々見惡いことである、それが面白く說かれて居る、一通りは彌勒が問ふ方で文殊が答へる方になつて居るのだけれども、その問答の意味が如何にも深遠で、どちらも奧に深遠なる意味を含めて話し合つて居るのであるから、問ふ方も知らずに問ひ居る譯でもなく、答へる方も唯だ一通り敎へるといふやうな風ではなくして、含蓄的の言葉を以て双方が述べて居る、丁度虛々實々の狀態である、それが文學的の方から言つて、文章と言ひ趣味と言ひ、實に巧妙に出來て居る、その點を天台智者大師が始めて發揮して、章安大師がその光景を書いて、この經文の微妙なる意義および文學的の價値を發揮されて居るのであります、それは經の全文に依つて見ないとその微妙なる味ひは出て來ない譯であるけれども、賓主問答といふことに就てはさういふことが古來から大事な點になつて居るのであります。先づそれだけのことを心得て置いて、次に摘出してある經文の本文を見たならば、大要了解することが出來やうと思ふのであります。

一二、爾の時に世尊四衆に圍繞せられ供養恭敬尊重讚歎せられて、諸の菩薩の爲に大乘經の無量義敎菩薩法佛所護念と名くるを說きたまふ、佛此の經を說き已つて結跏趺坐し、無量義處三昧に入つて身心動じたまはず。

この所は前に申した如く無量義經を說き終つて三昧に入つて、光を放つて居る光景を叙したものであります、これは皆「經家の言葉」と申して、このお經を結集する人達の問にその光景を叙述したること

とてあつて、釋尊の說法ではない、總て序品には釋尊の說法は一言も無いので、方便品第二に入つて始めて口を開かれるのであります。これは經家の叙述したる所の言葉であつて、その時の光景を叙して居るのである。

「爾の時に」といふのは、無量義經が終つたその時であります。釋迦牟尼世尊は「四衆」といふ大勢の弟子達、即ち比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷といふ僧俗の男女に圍繞せられて、「供養乃至讃歎」せられて非常な尊敬を受けつゝあつた。さうしてその尊敬の間に諸〻の菩薩の爲に大乘經の無量義經と云ふのをお說きになつたのであるが、その無量義經を「敎菩薩法佛所護念」といふのは、これは佛敎の中の一番善い敎を褒める言葉として使はれて居るので、法華經もこの言葉をその儘用ひるのでありますが、菩薩を敎ゆるの法、佛の護念する所といふのて、同じ佛敎の中でも小乘敎であれば菩薩を敎ゆる法といふことは言へない、菩薩を敎ゆるの法といふのは非常な偉大なる精神を奬勵して所謂他を利する所の敎であつて、今の文明でいふやうな個人を中心にして權利利益を本にしたやうなものてはない、又物質的てなくても高い精神生活の中でも、個人の事だけをいふのを佛敎では二乘と言ひ、獨善主義、小乘敎と言つて居る、儒敎でもそれは小人一己の敎と言つて、自分だけに就てのことてある、「己れを潔くせんと欲して大倫を亂る」と孟子が言つて居るが、儒敎の君子の道といふのも個人を中心にしての思想てはない、これだけは何と言つても西洋の文化と東洋の文化との違ふ所である、日本の神ながらの道も個人本位てはない、菩薩の精神は何處までも上に菩提を

求め、下に衆生を化すると稱して、非常な高遠なる理想に活きつゝ利他の活動をするのを菩薩といふのてある、その菩薩を敎ゆる所の法てあるといふ。それ故に佛が護念する所て、これは大事な敎てあるとして佛が護つて居られるのてある、丁度日本の三種の神器といふやうな譯て、天皇親らそれを御保護なさるといふやうな意味て、この敎は輕からざるものてあるといふその重みを示す言葉として無量義經に斯の如き文字が使つてある。「敎菩薩法佛所護念と名くるを說く」といふのは即ち無量義經を說かれたのてある。その無量義經を說き終つて「結跏趺坐し」、「結跏趺坐」といふのは心を落ちつけて靜かに坐つて居る有樣をいふのてあつて、さうして「無量義處三昧に入つて身心動じたまはず」、「三昧」といふのは專念といふことて、思ひを專らにするといふ意味てある、即ち精神の統一を圖つて他の雜念の混らないのを三昧といふのてある、それ故に身も心も動かないといふ安靜なる狀態てある、その精神を集中專念されて居ることは何かと言うと、所謂「無量義」といふ事に心を注いだので、之を原理の方から言へば一元の大原理があつて、その原理から萬象を發現して居るものてあるが、敎に就て言へば完全なる妙法の中より種々なる敎義が現れるのてある。だから宇宙の實相に就て言へば一元と、萬差に分れて居る所の萬象、即ち本體と現象との關係を專念して居るのてある、敎に就て言へば完全なる統一の妙法と、それから說き擴げた千差萬別の種々なる敎義との關係を考へて居らるるので、この「無量義處三昧」といふことは斯樣な深遠な意味を有つのてあります。それから說き出した法華經の敎てある、だからこの無

量義處三昧を經て法華經の統一の妙法を說き出す關係は、唯だ何も法華經を信ずる人に於てのみこれが尊いといふのではない、さういふ光景を法華經が書いて居るのである、けれども如何なる時代に於ても、如何なる國家に於ても、眞理を研究する者の狀態はやはりこの無量義處三昧でなくてはならぬ、思想の研究もその通りで、今我國は東西古今の思想が澎湃として集つたからと言つても、それを統一大成して行く上には、どう纏りがつくものかといふことを考へなければならぬ。この切れ〳〵な思想を相鬪はして居るといふことは、學者で言うたならば頭腦に纏りが無いといふことになる、文明で言うたならば混亂せる文明である。さういふ事は眞理であるから誰も反對することは出來ない、幾ら學問をしていろいろの事を學んだからと言つても、その纏りがつかないて論語を讀めば論語のやうな氣になり、法華經を讀めば法華經のやうな氣になり、又西洋の哲學書を讀めばその方の氣になつて、そうして自分の頭腦に一つも纏りがつかないといふやうな者は學者ではない、未熟な頭腦である、文明に於て種々なる思想が勃興して、それを能く纏りをつけて統一大成することが出來ない、その文明が所謂無量義處三昧に入つて統一の妙法に達し得ないとするならば、今の文明は佛敎の所謂爾前方便の文明である、これが眞實開顯の文明に達するならば、もつと秩序を立てゝ一々皆無量義處三昧に入つて、身心動ぜずして眉間の光を放つて、それより妙法を說き出すといふやうに、整うたる文明に向はなければならぬ譯のものである。それ故にこの光景は如何にも結構な有樣で、唯だ法華經を信ずる者の爲に斯ういふ光景が有難いといふ譯ではない、人間である以上は總てこの無量義經より法華經に移つて行く狀態を、身に體現して行かなければ、個人としても團體としても、理想の文明に達することは出來ない譯である。

一三、爾の時に佛眉間白毫相の光を放つて、東方萬八千の世界を照したまふに周遍せざること無し。

その時に眉間白毫相の光を放つて東方萬八千の世界を照されたので、「その時に眉間白毫相の光を放つて東方萬八千の世界を照したまふに周遍せざること無しして、遍く何處もかも照さゞる所なく照したといふ、この照した中に總ての事柄が見られる譯ナンである。物は說くといふと長くなつて順序を逐ふて行くけれども、照せば一時である。それであるから物を統一大觀するといふことは、照したといふ光景が一番宜いのである、所謂「達人は大觀す」といふやうな譯で、光を以て全體を照せば見えない所は無い、例へば或る町に行つてその町の全體を大觀しやうといふのに、高い所に上つてその町の全體を見れば、何處に家が在つてどういふ有樣になつて居るといふ總てを一遍に見ることが出來る、それを話せば斯ういふ結構な町で何軒〳〵ある家が在つて、それがこんな工合になつて居るとかいふやうに長い事になつて來るけれども、之を照見する時は即ち一時であつてその全體を見ることが出來る。これは即ち眞理は說けば長いものである、けれども照せば一時に現れるといふことを示して居るのである。この光の中に照された實相、佛の光明に依つて照し來りたるその有樣を、今度は次第に說いて來るのが法華經になるの

てある。禪宗の坊さんが「教は反古だ」といふやうなことをいふのは、愚にもつかぬ話で、それは無論教といふものは照し出したる事實を物語つたものに相違ないけれども、語らんければ宗教は生じないのであるから、經典を蔑視すれば宗教はない、「事實は事實だ」といふので默つて見て居るといふのなれば、同じ人間、同じ尊さの者が見るならば肯き合つて、所謂「佛と佛とのみ乃し能く諸法の實相を究盡したまへり」といふやうに行くのである。然し佛と佛とのみなれば禪宗といふやうな宗旨を開くことは要らぬ、一方は判つて一方が判らぬといふ者の間に、そこに教が起るのである、判つた者同士の間には、教といふものは無い、唯だ肯づき合ふといふだけである、佛教が教である以上は、その照したる事實を說き出すその說くことが、照した事實と能く合致して居れば、所謂理教不二と言つて、その眞理と教とが二ならずして、能くその眞理を說き出して居るのを以て、善き教といふのである。「教は言葉で、眞理は別だ」といふならば、「その別だといふ眞理は何か」といふことになる、それはやはり教を以て語らなければ判らない、左樣なことは贅論である。無論筆といふ物があつて、さうして「これは筆ぢや」といふ言葉がある、「筆ぢや」といふ言葉と筆その物とは別だといふやうなことは、言はなくても判つた話である。小學校で物を習ふ時分から、例へば慈姑なら慈姑の繪が書いてある、さうして側に「クワキ」といふ言葉がある、「クワキ」といふ言葉と慈姑といふ物とは別だといふやうなことは必要がない、即ちその實物があつて實物の名を言ひ現して居るのであるから左樣なことをゴタ〳〵いふ必要は無いのである。尤も中には形式に流れて慈姑の實物を忘れて、「クワキ〳〵」といふ言葉ばかりになつたやうな宗教も世の中にはあるから、さういふ間違つた者の爲には、慈姑といふのは斯ういふ品物だといふことを教へる必要もあるかも知らんけれども、それは俗人の間の事であつて、詰らぬ事である。今の法華宗の人がお自我偈を讀みながら、「我れ佛を得てより」と言つて、佛の事はまるで忘れてしまつて、唯だ鬼子母神とか帝釋とかいふやうな婆羅門の神だけを有難がつて居るといふやうな者の爲には、「我とは佛の事ぢや」といふやうな話をしなければならぬか知らんけれども、それは餘りに思想の頽廢した場合のことで、今日の文化の程度に於ては全然不要の問題である。吾々が佛教を研究するにはさういふ低級なる議論をする必要は無い、茲に釋迦が光明を放つて實相を照し出した、それを皆が見ることは出來たけれども、その意味合に就て佛が語られることを聞かうとする所に法華經が起つて居るのである、天台は之を理教不二と申して居るのであります。

一四、佛子文殊、願はくば衆の疑を決したまへ、四衆欣仰して仁及び我を瞻る、世尊何が故ぞ斯の光明を放ちたまふ、佛子時に答へて疑を決して喜ばしめたまへ、何の饒益する所あつてか斯の光明を演べたまふ。

斯の如く光に依つて照されて居る間に、その光が如何にも美しい、さうして又唯だ光といふけれども、それが非常に堂々たるものであつたが故に、そこに集つたる者が驚いて、どういふ譯で斯ういふ光景が

演出されたものか、佛の眉間の光は常に輝いては居つたけれども、今日のやうに東方萬八千の世界を照すやうな偉大な光になつて現れたことはない、如何にもこれは尋常な事でないといふ所からして、集れる者が「その譯が知りたい」といふので、お互に誰に依つてかこの譯を聞きたいといふので、語り合つて居る時に、彌勒菩薩が代表者となつて、この事に答辯を與へて呉れる者は文殊に限るといふので、そこに集つて居る者の代表者として彌勒菩薩が出て文殊師利に向つて、今この一會の者が何故に斯ういふ光景が現れて居るかといふことに就て聞かんとして居る、それをあなたがお答へなさらなければならぬといふ事から問答が始まる譯である。「佛子文殊、願くば衆の疑を決したまへ云々」といふのは、彌勒の言葉であつて今皆の者が「仁及び我を瞻る」、即ち文殊師利と彌勒を皆が見て、それに望を囑してこの譯柄を語り合つて吾々に教へて呉れる者は文殊師利と彌勒とであると思つて居る、だからあなたはこれに答へて、皆の者の疑を解いて喜ばしめ給へと彌勒が言つた。この問答の中に於ても若しお前が言はなければ僕が教へる方にならうか、といふやうな意味があるのであつて、非常にこの間が際どい面白い所である、所謂「佛の化導を助ける」といふ意味に於て、双方の間に語り合が始まる譯である。「世尊何が故ぞ斯の光明を放ち給ふ」――今釋迦牟尼世尊はどういふ思召があつて斯ういふ美しい光を放つてお居でになるのか、その意味合をどうぞ一つ語つて貰ひたい、佛子たる文殊師利菩薩、あなたがどうぞこの事を判るやうにしてやつて貰ひたい、「何の饒益する所あつてか斯の光明を演べたまふ」、どういふ利益を與へんが爲にこのやうな光を放ち給ふたのであるか、之を語つて貰ひたいといふのである。尙ほこの兩者の間にいろ〳〵の往復論談があるのでありますが、最後に至つて文殊が答へた言葉が次に摘出する所である。

一五、今此の瑞を見るに本と異なることなし、是の故に惟忖するに今日の如來も當に大乘經の妙法蓮華敎菩薩法佛所護念と名くるを說きたまふべし。

文殊がいふには、「今この瑞を見るに本と異なることなし」、今釋迦牟尼佛が光を放つてお居でになるこの瑞相は、自分が昔日月燈明佛といふ佛の時に生れ合せて、その光景を拜し得た所と少しも違はない、日月燈明佛はこの光を放つて續いて法華經をお說きになつた、これがその佛の世に出てた大乘の眞實を語らんとする時の光景であつた、それ故にその事から推して考へて見れば、今日の如來即ち釋迦如來に於ても、將に大乘經の妙法蓮華敎菩薩法佛所護念と名くるをお說きになる爲に、この瑞相をお現しになつたと思ふと言つて居る、玆にも前と同じく「敎菩薩法佛所護念」といふ言葉がついて居る、それは始め申したと同じ意味で、尊い法華經であるが故にこの尊號を加へてある譯である。

これで法華經が現れるといふことになつた爲に、一會の集れる者は皆法華經の說き始まることを待ち焦れて居ることになる、そこにいよ〳〵佛が安祥として起つて舍利弗に告げるといふことになつて、法華經の幕が明いて來る譯である。

一六、佛是の法華を說いて衆をして歡喜せしめ已つて、尋いて即ち是の日に於て天人衆に告げたまはく、諸法實相の義已に汝等が爲に說きつ、我れ今中夜に於て當に涅槃に入るべし、汝一心に精進し、當に放逸を離るべし。

これは前の事柄を述べた傍になつて居るので、日月燈明佛が涅槃の最後訣別の言葉として說かれたものである。けれども日月燈明佛のことで說いても、釋迦牟尼佛のことで說いても、結局は皆一つになる、だからその名前に拘泥する必要は無い、「これは日月燈明佛のことぢや」「これは阿彌陀のことぢや」と思うて居ると佛敎は實は判らん、いろ〳〵な名前に托してその事柄を說くのであるから、これは日月燈明佛の涅槃の光景であるけれども、釋迦如來の涅槃經の時の言葉も同じ事である。それ故に開顯すれば皆釋迦一佛の大化導として見らるることであるが、茲はまだ法華經の始めであるから、涅槃の夕の事を釋迦の名に於て說くことは出來ない。そこで日月燈明佛の名に於て釋迦の涅槃の時の誡告を茲に擧げて來るのである、說く前からこの誡告を擧げてあることが非常に大事なことで、涅槃經にはいろ〳〵の遺訓があるけれども、其中の一番大切なのがこの遺訓である。

日月燈明佛が法華經を說き終つて、それから仰しやるには、我はモウ諸法實相の義もお前等の爲に說いた、諸法實相の事、宇宙の大眞理、佛敎の大哲理は法華經に於て殘らず說いた、モウ用が無くなつたから今夜夜中に自分は涅槃に入らうと思ふ、就ては最後の遺訓を試に留めて置く、それは長い言葉ではない、「汝一心に精進し、當に放逸を離るべし」、唯だ我が訣別の言葉は、汝等が一心に精進して——「一心」といふのは心の散亂を防いで、「精進する」といふのは正しい目的に向つて驀らに進み行く、弱りかけた時分に又力を加へて退轉なく進むことである、さうして「當に放逸を離るべし」で、怠けてはいかん、ノラクラして居つてはいかん、何處までも勤勉努力して行かん限りには、どんな善き敎があり眞理があつても、その敎を守り傳へる所の者が懶惰であつたならば、到底その敎を盛んならしむることは出來ない。それ故に諸法實相の義と、さうしてその眞實の敎を盛んならしめる所の奮勵努力が最も大切であると示された。それ故にこの法華經に就て働く者は、皆この努力の精神を發揮して來るので、殊に日蓮聖人の如きはそれである、今日日蓮門下の者に懶惰の人もあるやうであるが、それはお經を拜讀みにして居つて少しも自覺を持たんからである、ナンボ法華經が善くとも精進でなかつたならば駄目だといふことを非常に强く感じなければならん。これはこの所ばかりではない、到る處に說かれるのである、日蓮聖人はそれを戒めて「徒らに遊戲雜談のみして明し暮さん者は、法師の皮を著たる畜生なり、法師の名を借りて世を渡り身を養ふと雖も、法師と成る義は一も無し、法師と云ふ名字を盜める盜人なり。」と言はれて、盜人なり畜生なりとまで烈しい言葉を以て懶惰の生活を戒められたのである。さういふ聖訓に觸れ、又斯の如き敎訓に觸れても、尙ほ且つ懶惰の生活を辿るといふやうな者は、實にモウ朽ち果てたる人間である。それ故に法華經の敎は奮鬪的活

動的精神を尊むのである。他の消極的なる佛教では、隱遁でもして唯だ心閑かに暮せば宜いといふやうな厭世悲觀退嬰といふやうな意味のことも見えるけれども、法華經はさういふ退嬰的のものではない、精進奮勵の教である、それが茲に洵に明白に現れて居るのである。

方便品第二

方便品はお自我偈に次て大事な經文であるが故に茲には吾々の朝夕讀む所の全文を講述する譯でありますが、その前に方便品といふ題號に就て簡單に申せば、方便といふことは非常に大事な言葉で、之を正しく解して居る人は殆んど鮮い位のことである。方便といふのは梵語を譯した言葉でありますが、一通りは水の方圓の器に從ふが如く、それに適應するといふことが方便といふ言葉である、けれどもそれは一番低い意味の方便であつて、天台大師が之を解釋するに、少くとも三通りの意味を心得なければならぬといふことを說いて居る、詳しくは八箇條の大議論を書いて、方便の二字に就て『玄義』に說明して居る事は非常に詳しいものである。それは中々廣大な義門を開出して居りますけれども、今はその三種の事だけをお話するのである。その一は方用方便、その二は能通方便、その三は秘妙方便といふのである、方用といふのは水の方圓の器に從ふが如く、機根に當てがふ方のことで、世俗多くはこの意味を用ひて居る、病に隨つて藥を與ふるが如しといふ言葉を用ひて居るが、それは如來の方便にあらずと天台は解釋して居る、釋迦如來が應用する所の方便は、唯だ當てがつて、機の爲に教を殺して對手に隨つて行くといふ事になれば、教の權威といふものは無いのであるから、教を輕んじて機根を重んずるといふやうな、左樣な下手な方法は釋迦如來は取らない。方便は「善巧方便」と言つて、非常な善良なる意味と巧妙なる意味とがなければならぬ、機根の方に教を引きづられて行くといふことは拙なるものであるから、釋迦は善巧方便は用ひたけれども、左樣な拙劣なる方便は應用しないといふのである。世俗に何事でも「それも方便」「これも方便」といふ風に使つて居るのは、所謂愚劣なる方便であるが故に、教の方が段々低劣になり、或は迷信化して行くのである、今の佛教界に應用されて居るが如きは、如來の方便ではない、一切經をその意味に於て披いて見るならば天台の解釋された通り、決して釋迦は左樣な愚劣な方便を應用して居る蹟は無い、阿含經を見ても法華經の思想から開顯すれば、その儘活躍して來るものである、非常な偉大な宗教であつて、世俗に多く用ひて居るのは、後に佛教に混入して來た所の俗信である、釋迦が應用したものではない。それは釋迦の經典の正確なるものは、阿含經とか華嚴經とか般若經とか法華經とか涅槃經とかいふやうなお經は、釋迦が說いた確かなしつかりしたお經であるけれども、お地藏樣がどうぢやとか、お藥師樣がどうぢやとかいふやうなものは、皆後の雜然たるものであつて、多くは佛教に混入した思想である。釋迦が堂々と說き去り說き來つた一代の佛教には、方便を應用したからと言つて、左樣な低劣な弊害に陷るやうなものは一つも無い。

それから第二の能通方便といふのは、教の方が權威を有つて居るが故に、淺い所から教へても直ぐ深

い方へ進んで行く、「能通は門の如し」と言つて、能く通ずるものである、門を入つた者は必ず堂に至らしむる、門の處でマゴ〳〵させるといふやうなことならば門は要らぬ、門といふものは、堂に至らしめんが爲のものである、そのやうに淺き教を與へても必ず深き所に引き來るのが方便の意味である。それは釋迦が盛んに應用した所であるけれども、この能通の方便のみであるならば、法華經の方便ではない。それは釋迦は用ひたけれども尙ほ且つ法華經の上には能通の方便を採らぬ、第三の秘妙の方便といふのは如何にも微妙な意味で、方便のやうでそれが眞實である、實に曰く言ひ難き微妙な意味を有つて居るものである、それは丁度日本のお御齋などを考へると、あれが微妙なものである、桃太郎の齋といふやうな子供にも判るやうに、一婆さんが川へ洗濯に行つて、桃がドンブリ〳〵流れて來た」といふやうなことをいつて居るのは、子供が喜んで聽くことであるけれども、その中に含まれて居る精神に至れば、所謂大和民族の建國以來忘るべからざる大思想である民族精神の一番大事なものが桃太郎の話の中にある譯である。だからアヽいふものは何處まで行つても差支ない、幾ら文明が進まうが大學を卒業した者であらうが、「お婆さんが川へ洗濯に行つて、桃がドンブリ〳〵流れて來た」といふことは、ちやんとそれで意味を有つて行くのである、少しも弊は起らないさういふ巧妙なるものであつて、これが所謂善巧方便である、それは世の中には澤山あることで卑近な言葉の中に微妙なる意味を有つて居るものがある、例へばイロハ歌留多といふやうなものは、洵に平易通俗的なものであるけれども、その中に高遠なる意

本多日生猊下著書一覽

○法華經の心髓　金壹圓六拾錢
○日蓮主義初步　金七拾錢
○日蓮主義　金壹圓五拾錢
○修養と日蓮主義　金壹圓五拾錢
○國民道德と日蓮主義　金壹圓五拾錢
○日蓮聖人正傳　金貳圓貳拾錢
○日蓮主義綱要　金貳圓貳拾錢
○日蓮聖人の感激　金貳圓貳拾錢
○日蓮主義の運用　金貳圓五拾錢
○東洋文明の權威　金貳圓貳拾錢
○國民教化　金貳圓貳拾錢
○法幢　金貳圓貳拾錢
○戰士の伴侶　金貳圓貳拾錢
○思想問題の歸結と法華經　金貳圓
○聖訓要義　各卷壹部金貳圓貳拾錢
○開目抄詳解　上卷一部金貳圓八拾錢
○聖語錄　金貳圓八拾錢
○優婆塞戒經通解　金八拾五錢
○大乘本生心地觀經通解　金八拾五錢
以上各送料一部金八錢
○法華經講義　上卷下卷各一部金參圓四拾錢　送料一部金拾八錢

○大藏經要義　一部金參圓八拾錢　送料一部金十一錢　並製本金參拾錢　送料一部金五拾錢　送料一部金貳錢
○法華經要文　上卷刊行中　金參拾錢　送料不要
○佛教信仰の正統　金壹圓參拾錢郵稅六錢
以上購讀希望の方は左記へ申込まるべし
東京市外品川町妙國寺內
大藏經要義刊行會
振替東京三一五九六番

統一定價

一冊	金參拾錢	送料一錢
一ヶ年	金參圓參拾錢	送料共

廣告料

一頁	金拾圓
半頁	金六圓
四分ノ一頁	金參圓半

前金の事

大正十一年四月廿七日印刷納本
大正十一年五月一日發行
（第三百二十八號）

東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
編輯兼發行人　國友日斌
東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷人　鈴木日雄
東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
印刷所　三秀舍

不許複製

發行所　統一發行所
振替東京五一〇七一番
名古屋市中區新榮町四丁目十五番地常榮寺內
編輯所　統一編輯所

目次

社會と教化（時言）……本多日生
釋尊の大恩……本多日生
實學……山根日東
日蓮主義より見たる無量義經……井村日威
記事報道十數件……
法華經要文講義……本多日生
那先比丘經通解……本多日生

第廿六年六月號